

# 清末小説から 148

2023.1.1

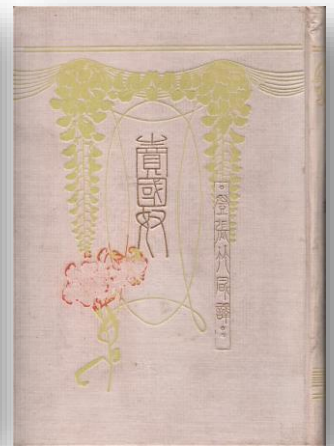
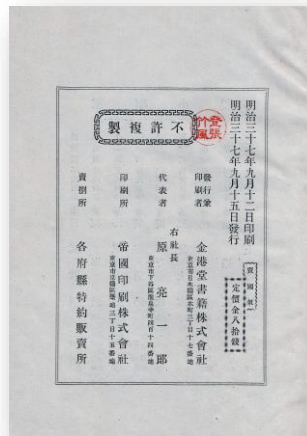
- 呉禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』(下) —— 登張竹風訳『賣国奴』……………荒井由美 1
- 呉禱漢訳『侠黒奴』 —— 尾崎紅葉訳『侠黒兎』……………沢本香子27
- 厚生「青娥血涙」は康有為作か……………樽本照雄51
- 文娟論文を評した文章を評する —— 陳鵬安論文について……………荒井由美53
- 清末小説から59

★本年もよろしくお願ひいたします。本号は増ページになりました。呉禱についての新しい発見があるのはうれしいことです。経歴について不明の箇所が多いためまだ知られていない事囀

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

呉禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』(下)  
—— 登張竹風訳『賣国奴』

荒井由美



ついでには後の『明治文学書目』(1937)\*18に記載がある。

### 3 竹風訳『賣国奴』

原著者不記、登張竹風訳『賣国奴』(大序+15+大団円 金港堂書籍株式会社1904.9.15)である。

登張竹風(本名信一郎、1873-1955)はドイツ文学者、評論家<sup>W)</sup>。

原著者、原作の記載はない。ただし原著者に

(軍事小説) 賣国奴 訳ズーデルマン著  
 三十七年九月 金港堂 菊版三九〇頁 219頁

いうまでもなくヘルマン・ズーダーマン

(HERMANN SUDERMANN) 著 “DER KATZENSTEG” だ。

竹風訳『賣国奴』が抄訳であることは言われている。またある人は「登張訳は翻案の要素が強く」\*19と述べる。しかし翻案は言い過ぎだ。本稿文末に「賣国奴固有名詞対照表」を掲げる。ドイツ語原文\*20に出てくる固有名詞をはじめから順に拾い、それに小宮豊隆日訳(以下、原作というのは豊隆訳を指す)と竹風日訳および呉構漢訳を対照させた\*21。

竹風が省略したものは空欄にする。省略以外を見れば記述された固有名詞が順序どおりに対応していることがわかる。すなわち井伏鱒二が行なったような話の前後を入れ替えるとか加筆などの改変は基本的になされていない。

竹風日訳が原文を省略した部分はある。たとえば「その八」206頁に続くべき原作の第12章(正保と百合のふたりが降誕祭を祝う。豊隆訳273-299頁)を削除する。しかしそれを除けば原作をほぼ忠実になぞっているのが事実だ。従来からいわれる抄訳と称するのが妥当だろう。

その竹風日訳にそのまま対応するのが呉構漢訳だ。竹風が日訳した個所は呉構もたいがい漢訳している。「たいがい」というのは呉構の漢訳方法としてややもすれば文章を修飾する方向に流れがちという傾向があるからだ。また加筆、書き換えが強い箇所もある。おいおい見ていく。

竹風日訳の題名は『賣国奴』だ。筆者からすればどこか違和感がある。

ドイツ語原題は『猫橋』という。敵のフランス兵を「猫橋」に案内して間道を抜け、味方であるはずのドイツ兵を背後から攻撃させた。その土地の人々からすれば賣国奴だ。それはほかならぬ主要人物ボレスラフ(偽名バウムガルト中尉)の父親を指す。だからベアトリス・マーシャル(BEATRICE MARSHALL)は英訳題名を『レジーナ、または父の罪 REGINA OR THE SINS OF THE FATHERS』とした。ここ

の父親は複数形だ。ボレスラフの父だけとは限らない。主要登場人物にはそれぞれ父親がいる。英訳を重訳した井伏鱒二訳は『父の罪』(1924)とした。さかのぼれば小宮豊隆はドイツ語から翻訳して『罪』(1914)だ。小宮はその「序」で「私は初め是を『親の罪』とする積りでゐた」と述べる。『父の罪』と同じだ。後の生田春月は『猫橋』(1939)で原題のまま。いろいろある。

余計なことだが題名について一言。竹風訳に出てくる語句にもとづき別案として提出すれば『賣国奴の子』(384頁)でもよかつたのではないか。だいいち『賣国奴』という書名では政治小説、歴史小説のような印象を受ける。竹風日訳には佐々醒雪「序」がありそこで「軍事小説」と書いている。原作がナポレオン戦争を背景にしているから誤りではない。商務印書館「説部叢書」初集本が角書を「軍事小説」とするのはそれによるのだろう。ただし作品の実質は恋愛小説の要素が強いから題名との落差が大きい。そこを指して違和感があるという。

#### 4 呉構漢訳『賣国奴』

漢語には「賣国賊」という単語がある。しかし竹風『賣国奴』について呉構は題名を変更せずにそのままを使用した。

呉構漢訳の題名は作品によって異なる。一部を示す。

黒岩涙香の『有罪無罪』を『寒桃記』に、同じく涙香『梅花郎』を「博浪椎」あるいは『棠花怨』とか、または柳川春葉「虚無党の女」を『薄命花』へ、さらには嵯峨の家主「当代の露西亜人」を『銀鈕碑』などと大きく変換させた。一方で元の作品に近い題名にするばあいもある。たとえば英人ブラック『車中の毒針』は平仮名を抜いた『車中毒針』とする。『賣国奴』は底本のままだ。各作品により柔軟に命名している。統一方針があるわけではなさそうだ。

呉構による独特の固有名詞漢訳法について説

明する。時間的に見ればこの『賣国奴』あるいは『車中毒針』が早い使用例かもしれない。

主要登場人物を見るとわかりやすい(カタカナ表示は小宮豊隆訳を使用しドイツ語も示す)。

男性主人公はポーランド系の名前を持つドイツ人ボレスラフ、フオン、シユランデン(Boleslav von Schranden)だ。竹風は日本風に砂田保正(すなだ やすまさ)を当てた。シユランデンという音から連想し砂田になったと思う。呉構が拠っているのは竹風日訳のみ。だから日本語読みの「すなだ」を漢音で写して「史拿[那]特」に、「やすまさ」は「やす」から「約西」にした。日本語音を漢訳したということだ。つまり竹風の砂田保正の漢字表記そのままは使わなかった。シユランデンの父親は賣国奴だ。ゆえに彼は外地にあって偽名を使用した。その偽名バウムガルト(Baumgart)中尉は竹風によって山園(やまどの)中尉になる。呉構はそれを音訳して「雅曼」だ。これも前半の「やま」にあてたもの。

女性主人公はレギーネ、ハツケルベルク(Regine Hackelberg。マーシャル英訳ではRegina)という。竹風は百合(ゆり)にした。呉構はそれを漢音訳して欧麗である。音訳であって中国化したわけではない。

同様の漢訳方法を採用した漢訳作品にはのちの『寒牡丹』(1906)、『寒桃記』(1906)、『棠花怨』(1908)そのほかがあることを指摘しておく。

### 竹風日訳の大序

竹風はドイツ語原文をどのように抄訳したのか。まずそれから見ていく。竹風日訳を理解するために冒頭部分を引く。ここだけ参考として小宮豊隆と生田春月の日訳も掲げる(ルビ省略。くり返し記号の一部は文字になおした。以下同じ)。

【原文】Der Friede war geschlossen. Die

Welt, mit welcher der Korse ein halbes Menschenalter hindurch Fangball zu spielen gewagt, hatte sich wiedergefunden.

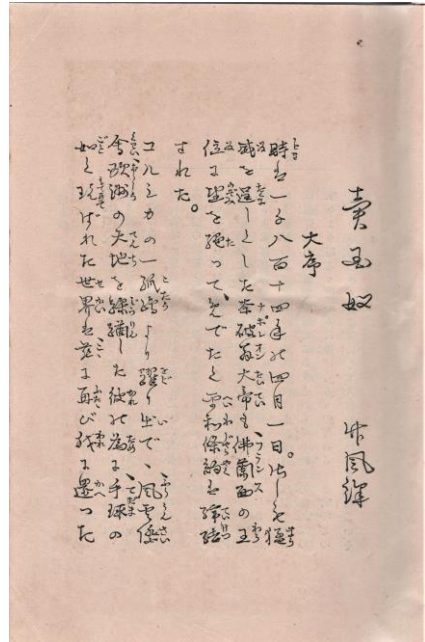
和平が成立した。コルシカ人が長年にわたって手玉に取ってきた世界は再び姿を現わしたのだ。

【豊隆】和約が結ばれた。世界は、かのコルシカ人から十余年の間ぶつ通しに大けなない玩具の代にされてみた世界は、再び自身を見出した。1頁

【春月】平和条約が結ばれた。(訳者註。一八一四年の和約)多年、かのコルシカ人(ナポレオンのこと)におもちゃにされてみた世界は、やうやく自分にかえる事が出来た。9頁

原文のコルシカ人は春月が注しているようにナポレオンをさす。全欧州がナポレオンによってかき回された状況を説明した。以上が原文だ。

竹風日訳を見る。「賣国奴 大序」が冒頭1頁にある。竹風の手書きをそのまま印刷していて珍しい。



【竹風】時は一千八百十四年の四月一日。さしも猛威を逞しくした奈破翁大帝も、仏

蘭西の王位に望を絶って、めでたく平和条約を締結された。／コルシカの孤島より躍り出で、風雲際会、歐洲の天地を蹂躪した彼の為に、手球の如く玩ばれた世界は、茲に再び我に還った(注：以上手書き)のである。1-2頁

ここを見る限り原文どおりとはいかない。年月を加筆して説明した。ただし拿破翁、平和条約、コルシカ、手球、我に還った、を共有して全体の意味は伝えている。つまりナポレオンによる歐洲の戦争と彼の願望失敗がもたらした平和条約締結、さらにナポレオンの出自を加筆しながら歐洲がもとに戻ったことを述べる。

竹風日記の冒頭原稿は変体仮名を使用せずとも読みやすいものではない。それを呉禱はどう漢訳したか。

【呉禱】 話説西歴一千八百十四年間。其時正是歐洲有名豪傑拿破崙皇帝威風掃地之際。他放出驚天動地手段。要奪取法蘭西的君位。無奈各國群起而攻。不能如願。不得已大家會議。纔結了平和條約。須知拿破崙生長在地中海當中一箇孤島。名叫科士嘉。是法國一箇默默無名的人民。只因他体魄剛強。性質英毅。自從跳出孤島。到了歐洲之後。就如大鵬展翅。鯤魚翻波。攪亂得全歐中原。湯揚鼎沸。幾乎踹成平地。玩弄各國。如掌上丸球。烽火連天。砲聲震地。及至大事不成。功名不就。銷聲匿跡。浪靜風平。這纔歐洲還是歐洲。百姓仍是百姓。1頁

さて西暦1814年というのは正に歐洲有名  
の豪傑ナポレオン皇帝の威光がなくなる際  
であった。彼は驚天動地の手段を繰り出し  
てフランス王位を奪取しようとした。いか  
んせん各國が一斉に立ち上がり攻撃したた  
めに彼の願いはかなわず、しかたなく會議  
により平和条約をようやく締結したのだ  
った。知っておかなければならないのはナポ

レオンは地中海の一孤島コルシカに育った  
フランスの無名の人だ。彼の身体と精神力、  
性格の剛毅さによってのみ孤島から跳び出  
して歐洲に来てから後は、大鵬が羽を広げ  
て高く飛び、大魚が波を翻すように歐洲全  
域を攪乱し、煮えたぎるほどに大混乱させ、  
ほとんど平地になるほどに踏みつけた。あ  
たかも掌中のボールのように各國をもてあ  
そび、戦火はいたるところに及び砲声は大  
地を震わせたが、大事と功名は成就せず、  
鳴りを潜め静まりかえった。それでようや  
く歐洲は歐洲になり國民はもとの國民にな  
ったのだ。

呉禱は竹風日記をたどりながら少しずつ加筆  
していることが一目瞭然だ。ナポレオンにつ  
いて不案内かもしれない清末の読者に知識を補足  
し供給した。修飾して「大鵬展翅。鯤魚翻波」、  
「湯揚鼎沸。踹成平地」、「烽火連天。砲聲震  
地」、「大事不成。功名不就」、「銷聲匿跡。  
浪靜風平」のように4字句が自然に出てくるの  
も呉禱らしい。

続く文章も見ておく。

【原文】 Zerschunder, zerfetzt, aus tausend  
Wunden blutend, mit Schachtfeldern besät  
wie mit eiternden Schwären, halb Kirchhof  
und halb Trümmerstätte - so fand sie sich  
wieder.

砕け散り、ズタズタになり、千の傷から  
血を流し、化膿したただれのような穴に覆  
われ、半分は教会の墓地、半分は廢墟のよ  
うな場所となっていたが——そうして自分  
を取り戻したのだ。

【豊隆】皮を剥かれ、ずたずたに引裂かれ、  
幾千の傷口から血が流れ、瘡蓋になりかけ  
た吹出ものの様に方々に戦場が散ばつて、  
半ばは墓地半ばは廢墟——かく世界は再び  
自分自身を見出したのである。1頁

【春月】皮を剥がれ、引裂かれ、無数の傷口から血が流れ、化膿しかけた腫物みたやうに、彼處も此處も戦場だらけになつて、半ば墓地、半ば廢墟と云つた有様で——世界は我れにかへつたのである。1頁

「そして自分を取り戻したのだ」とここでも歐洲が自己回復したことを重ねて述べる。上で見るようにそれは後ろに置かれるが次に引用する竹風日訳は前にも置いて強調した。

【竹風】然り、世界は再び旧に復したのであるが、裂かれ、切られ、屠られたその傷口よりは、まだ生温かき血が流れつゝあるのではないか。嗚呼、一将功成り万骨枯る。我に還つた世界は、唯到るところ寺院の墳墓と、破壊無残の光景とを見るのみであつた。2頁

「嗚呼、一将功成り万骨枯る」はいうまでもなく竹風の加筆だ。吳禱がそれをそのまま使用していることを次に示す。

【吳禱】時局漸復了旧觀。那些被傷痕被剝殺被屠戮的冤命殘魂。流着鉄血。漸得了穩和之氣。咳。一将功成万骨枯。古人的話。真有這箇情景。何況是功未成呢。放開眼睛一看。則見到處墓門高拱。累累的枯草無辺。那瑟瑟寒風。荒荒斜日。吹映到遊人身上。怎不叫人心腸陡冷成冰呢。

政局はようやく元の姿にもどつた。傷つけられ、討伐され、虐殺された無実の命と魂は黒い血を流しながらようやく穏和な状態を得たのである。ああ、一将功成り万骨枯るという古人の言葉には本当にその情景が込められている。ましてや功が成っていないのだからなおさらのことだ。目を開けてちょっと見れば、いたるところ墳墓の入り口は高く突きあがり、積み重なった枯草

は果てしなく広がっている。吹き渡る寒風と物寂しく傾いた太陽が、人々の身体に吹きつけ照らすのだから、どうして人の気持ちを急に冷やし凍えさせないであろうか。

上の部分も言葉を加えながら、それでもほぼ竹風日訳にもとづいている。ただしそれ以後もそうというわけではない。

原作は凱旋した若者たちを志願獵騎兵、コザツク兵、いわゆる国民兵の3種類に分類する。竹風はそれを略して「義勇兵」と「国民兵」のふたつにした。義勇兵は意気揚々と帰還する。一方の国民兵については原作にある疲労困憊した様子は翻訳せず、わずかに「彼等の前には裂けた喇叭のやうな声が響きわたり」（4頁）と抑えて翻訳描写した。

吳禱は清末の読者には兵士の2分類すらも必要ではないと判断したようだ。本文中に訳者自身がでてきて次のように概括して説明する。

【吳禱】看官。你道德国當軍人的。何等英武威嚴。何等纏綿情趣。這等軍人。上了戰場。自然是心悅誠服。情願粉身碎骨。博得箇千古留芳了。須知這班軍人。是為了祖国。從前受過法国欺侮。含着莫大恥辱。結成不共戴天之仇。箇箇都想替祖国爭光。對祖国效死。這纔起了同仇敵愾的心。殺得敵人大敗。幾乎亡種滅国。一國之中。養了百十万偌好的軍人。怎不叫人愛煞羨煞呢。如今他們大家奏凱還鄉。3頁

読者のみなさんは、ドイツで軍人になった者がどのように雄々しくりしいか、どのように優しく情緒があると思われるだろうか。これらの軍人は戦場にあつて当然に喜んで服従し、力の限り努力することを望み、そして悠久の名声を残すことができるのだ。知らなければならぬのは、これらの軍人は祖国のために、以前にフランスから侮蔑を受けたことがあるから極めて大



竹風は兵士の弾痕刀傷あるいは腕の繃帯を述べただけだ。呉禱はそこにこと細かく補筆した。そればかりか下線部(筆者による。以下同じ)のように竹風日記にあるはずもない日清戦争時に見えた中国兵卒の負傷までつけ加えた。

ドイツと清朝では軍事制度そのものが異なる。しかも80年前の歐洲におけるナポレオン戦争とアジアの日清戦争(1894-95)を同一視するのは不適當だという意見もあるだろう。しかし呉禱にしてみれば表面的な傷跡から見える兵卒の資質の差異に言及せざるをえなかった。これより前の個所で呉禱は要約してドイツ兵を賞賛した。それと対をなしているのがここに見る中国兵の怯懦な有様を嘆く加筆である。

一座の中に陰鬱な容貌の青年がひとりいる。山岡(バウムガルト)中尉という。灰出(ハイデ)村の農夫たちと生死を誓う義兄弟となって戦争に参加した。仔細があるらしく自分の経歴については口を閉ざしたまま行方をくらませた。フランス軍の捕虜になったという噂もあった。傷を負いながら生還し久しぶりに再会できたというのに解職の辞令をもらうために先を急ぐという。

話題は近隣の砂田村に住んでいる砂田男爵(本稿では父親を指す)のことに移る。名前が村名になるほどの有力者だ。

【竹風】先づ一人が口を開く。／「俺は砂田村の人達が、あの大地主の殿様を如何したか、早く聞きたくてならない。」／山園中尉は、息を凝して余念もない。18頁

砂田(スナダ)村はシユランデン村を指す。彼についてはそのいわくつきの過去がこのあと明らかにされる。竹風のいう山園(ヤマゾノ)とはバウムガルトのこと(呉禱漢訳を訳すときは竹風の表記をカタカナで使用する)。ここでは山園中尉はあくまでも砂田とは無関係という設定なのだ。ところが呉禱はそこをなぜだか書

き換えた。

【呉禱】有一箇人說道。雅兄是史拿特村人。請問那大地主男爵現在怎樣了。雅曼閉眼凝思。並不言語。独自靜坐着。9頁

ひとりが話した。ヤマゾノさんはスナダ村の人ですよ。あの大地主の男爵は現在どうなっているんですか。ヤマゾノは目を閉じてじっと考え、決して話すことはせずひとり静かに座っている。

山園(実はボレスラフ砂田保正)はその出身地が砂田村であることを仲間には秘密にしている。それを「雅兄是史拿特村人(ヤマゾノさんはスナダ村の人ですよ)」と暴露しては物語の筋運びが不自然になる。砂田村とは無関係を装っている人間に男爵の様子を質問してどうするのか。ただ呉禱の考えでは山園の出自について後で動転の告白があることの予告としたかったのかもしれない。しかしそれは無用なことだった。

村民は砂田男爵の屋敷に放火した。それには動機があった。村民のひとりが語る。

【竹風】御聞き及びでもござりませうが、村民挙つて、大叛逆人の男爵、仏探たる男爵、賣国奴たる男爵に愛想をつかした段ではござらぬ、不俱戴天の仇敵と狙つて、そもや七年このかた、赤児までが唄ひまする歌といつば。

砂田の殿様、犬畜生よ、／天罰、地罰、人の罰、  
毎日のやうに唄ひまする声は、天地も轟くばかり。神様も感納ましましてか願の半分は御聴き届けに相成つて、つい二三日殿様は頓死で往生すると、怨は枯骨にまで及びましてな、村の衆の誓が恐ろしいではござらぬか。死骸をそのまま邸の中へ、蠅も集れ、鳥もつゝけ、葬はするな、というの

ださうで。死んだ跡まで犬畜生でござるてや、ハハハ。21頁

【呉禱】你們可知道村裏的人。都恨那大逆不道的男爵。法国奸細的男爵。私通外國的男爵。結成不共戴天的仇敵。要置之死地。況且七年已來。從老的起。到懷抱的小孩。都唱着曲子道。史拿特男爵狗畜生。天罰地罰人也罰。從早到晚。一片呀呀喳喳的聲音。連天地也被他們轟小了。誰知天神也不容他。兩三天前。他竟死了。咳。這怨氣真是及於枯骨哩。村人的呪詛。不可怕麼。屍首停在屋子裏。蒼蠅也哄着。老鴉也啄着。死了以後。那模樣還是箇狗畜生。哈哈哈哈哈。10-11頁

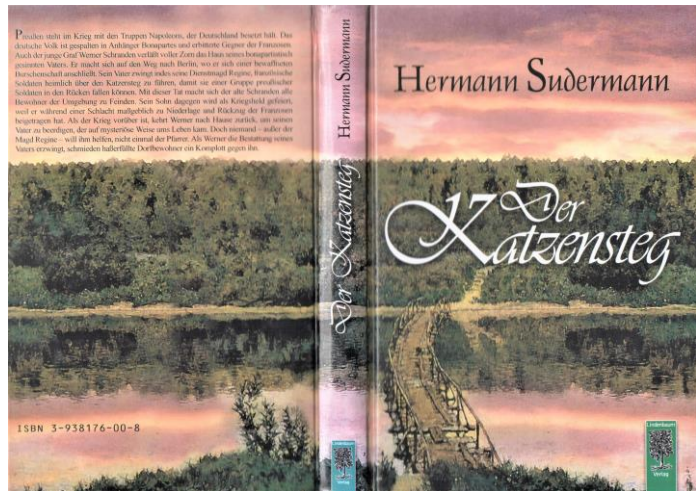
ご存じのとおり、村人全員はあの大逆無道の男爵、フランスのスパイの男爵、外国と密かに通じた男爵を怨み不倶戴天の敵となして死地に追い込もうと、この7年以來は老人から抱かれた子供まで皆が歌ったのは、スナダ男爵は犬畜生よ、天罰、地罰、人の罰、というもの。朝から晩まであたり一面のワーワーギャーギャーという声によって天地は圧倒されたのでした。あにはからんや神も許したまわず23日前に男爵は往生してしもうた。ああ、怨みは白骨までに及びましてな、村人の呪詛はなんと恐ろしいではありませんか。死骸は屋敷の中に留め置き、蠅はたかり鴉もついでみ、死んだあとのあの様子というのもやはり犬畜生でありますな。ハハハハ。

竹風の「日探」というのは「フランスの探偵」すなわち呉禱漢訳の「法国奸細(フランスのスパイ)」にほかならない。何の理由から敵国フランスのスパイ、ドイツにとっての大反逆者、賣国奴となったのか。山園中尉(砂田保正)とそれがどういう関係にあるのか。読者は疑問を持つだろう。段階を追ってそれを記述して解きほぐすのが作者の手法である。

『賣国奴』は長篇小説だ。本稿で呉禱の漢訳を検討するに当たり主としてふたつの事柄を中心に置く。ひとつは「賣国奴」の理由となった「猫橋事件」だ。もうひとつは主人公保正とその召使い、奴隷である百合の関係である。

### 砂田城攻撃＝猫橋事件——呉禱の誤解 1

猫橋が登場する。村人はおどけた調子で事件の概要を説明した。



猫橋の風景 1937映画



【竹風】そもそも猫橋と申しますのは、これ即ち千八百七年砂田男爵が砂田城を占領致しましたる仏蘭西兵の手引を致して、普国(プロシヤ)兵の背後を衝きましたる独逸有名なる名所古跡の一で御座ります。砂田城攻撃の事は申す迄もなく御案内の筈。そんじよそこらの曆にも出て居りますぢや。22-23頁

把握すべきことがある。フランス兵が砂田城を占領した事実だ。ここが出発点である。

男爵が居住する城島は吊り橋\*22でつながる。猫橋はこちらの橋とは別の場所にある。少数の人間しか知らない抜け道だ。事件の後に「独逸有名なる名所古跡」となった。さらに誇張して、曆にも書かれている有名事件だとふざけたのだ。

ご注意いただきたい。「砂田城」とは砂田男爵が居住する城島を指す。猫橋を渡って間道を抜ければ砂田村の外れに到達する。フランス兵はそれを利用してプロシヤ軍の後ろから不意を突く。猫橋がどこに通じているか具体的な地名はあげられていない。後の説明でどこかわかる。すなわち砂田村から離れた林の中に十字架を立てた小山がある(267頁/呉禱125頁)。ここが急襲されたプロシヤ兵のいた場所だった。猫橋から山沿いに行った到着点だと理解できる。後に墓地とされた。

この位置関係を竹風日訳のままに理解する必要がある。くり返せば、男爵の居住する城島から猫橋を抜けて砂田村の外れに出る。そこがプロシヤ兵の背後だ。

ところが呉禱漢訳ではその地理感覚が混乱している。それには理由があった。竹風日訳の「砂田城攻撃」という表記である(後述)。

砂田男爵の城が敵のフランス兵に占領された。それだけならば普通にあることだろう。特異なのは男爵が敵国フランス兵を指導して、味方であるプロシヤ兵の背後を襲撃させたことだ。それにより多くのプロシヤ兵が死亡した。男爵は

脅迫され強制されたのではない。自分の意志と判断によって積極的にそうした。男爵はフランスにとっては協力者、ドイツにしてみれば賣国奴である。砂田村の人々にとっては城主が裏切り者となった。

竹風はその事件を「砂田城攻撃の事」と称した。砂田城を拠点としてプロシヤ兵の背後を攻撃した事件という意味だ。前後を読めば誤解のしようがない。ここは豊隆訳「シユランデンの不意撃(ふいうち)」(23頁。Schrandener Überfall。マーシャル英訳は Schranden invasion)の方が分かりやすい。本稿では出発点を重視して「猫橋事件」と称する。

しかし呉禱はこの「砂田城攻撃」という漢字表現に引き付けられた。そうして砂田城そのものを攻撃したと誤解した。誤認にもとづいて無理に漢訳したから意味不明になった。

【呉禱】那猫橋。本是徳国有名勝跡。當一千八百七年。史拿特男爵。帶領着仏蘭西兵。占領史拿特城。衝擊我兵之背。那箇地方。就属了敵人。攻撃史拿特城的事。就是男爵領導的。那是那年四月間的時候。11頁

その猫橋はもともとドイツの有名な名所旧跡でありましたが、1807年にスナダ男爵がフランス兵を引き連れてスナダ城を占領し我が兵の背後を攻撃したので、そこは敵のものとなったのであります。スナダ城攻撃のことはすなわち男爵が指導したもので、その年の4月のことじゃった。

1807年のことだというのは竹風日訳そのままだ。「四月」は呉禱の加筆(注:54頁にある五月初五日と一致しない)。竹風にある「曆」は省略した。

注意してほしい。砂田城はもともと砂田男爵の所有なのだ。その名がついている所以である。

竹風日訳の後半部分にある「砂田城攻撃の事」をそのまま漢訳した。表面的にはそれで間違っ

てはいない。つづく「就是男爵領導的(すなわち男爵が指導したもの)」もいい。

問題は前半部分だ。呉禱は竹風の「砂田男爵が砂田城を占領致しましたる仏蘭西兵の手引を致して」の漢字を拾った。「砂田男爵」「砂田城」「占領」「仏蘭西兵」「手引」を組み合わせる。つまり平仮名の「しましたる」を無視した。これに「砂田城攻撃」をからませて訳文の前後を入れ替えた。

「史拿特男爵。帶領着仏蘭西兵。占領史拿特城(スナダ男爵がフランス兵を引き連れてスナダ城を占領し)」とする。男爵がフランス兵を導いて自らの砂田城を占領したという。それは違う。占領させたのではない、城島は先に占領されていたのだ。事実と地理的位置が異なっている。男爵がフランス兵に自分の城を占領させるのは奇妙だ。また猫橋がドイツの有名な名所旧跡になったのは「猫橋事件」発生以後のことだった。もともと有名であったわけでもない。呉禱の漢訳はどう考えてもおかしい。呉禱は「猫橋事件」についてそれ以降も一貫して誤認する。

フランス兵を実際に案内したのは男爵の召使い、奴隷である百合(レギーネ Regine/欧麗)だ。保正は後にはその百合本人から当時の状況を聞き出している。おなじ場面の別説明だからここにまとめて紹介する。

男爵は百合に命じた。城にいるフランス兵を案内して猫橋を抜けて行かせよ。次が百合の証言だ。

【竹風】(男爵の)『其方は仏蘭西のお方を一時間内に猫橋から山伝に案内することが出来るか。』とのお尋でございませう、私は仏蘭西の方々が、御城に参つてからは乱暴ばかり致して居ましたので、もうもう怖くて怖くて、泣き出しましてでございます。205頁

男爵の居城を占領したフランス兵はやりたい放題だった。女中を追い回し百合もその暴力的対象になりかねないという状態である(原作「城にゐる仏蘭西人の日の立て方は恐ろしい程で、女中を隅々に追ひ廻したん[り]なんかするのです。私は手籠にでも遭ひはせぬかと夫を恐れしました」豊隆訳271頁。注:「日の立て方」は時間の過ごし方)。この「御城」は男爵の居住する場所(城島)にほかならない。フランス兵が来てからそういう状態だった。ましてや乱暴なフランス兵の道案内をすること自体が百合にとっては恐ろしい。女ひとりだから何をされるかわからない。案内役を嫌がったのも当然だ。

ところがここでも呉禱は勘違いする。

【呉禱】又問我道。你能夠在這一點鐘以內。領了法蘭西兵過猫橋去麼。我想法蘭西無數軍人。若是進了城。一定要擾亂擄掠。做出凶暴行為。那豈不可怕麼。當時我竟哭了出來。96頁

お前はこの1時間以内にフランス兵を案内して猫橋を通っていけるか、とお尋ねになりました。フランスの無数の軍人がもしも城に入りましたらきっと攪乱擄奪して凶暴な行為をするに違いないと思いました。どうして恐ろしくないはずがありません。その時、私はとうとう泣き出してしまいました。

竹風日記の「御城に参つてから」は当時の状況を述べている。それを呉禱は「若是進了城(城に入りましたら)」と未来の仮定形に漢訳した。竹風の「砂田城攻撃」を誤解してそれから逃れることができない。

この誤解が生じた原因は竹風日記の用語のほかにもう1ヵ所ある。村外れでプロシア兵の前出墳墓を見た保正が過去を想像する場面だ。百合は黒装束のフランス兵を手引きしてここまで

やってきた。報奨金を手にして帰路についた時だ。

比較するために原作から豊隆訳を引用する。微妙なところで竹風日訳が異なることを説明するためだ。

【豊隆】夫から、人々が女を放したとき、罪障の酬金を隠囊に入れて独りで帰路についたとき、——如何に射撃の音、太鼓の轟き、火薬の稲妻、不意に襲はれたものゝ死の叫び——如何に此等のもの——恐ろしいフリーエの隊——があゝの女を近くにゐたゝまれなくしてしまつたことだらう。382頁\*23

「フリーエの隊」とはローマ神話の復讐の女神たち(furies)を指し「怒り」を表わす。原作には場所の明示はない。なくても猫橋を抜けて出た最終到達点(砂田村の外れ)で戦闘が行なわれたことは自然に理解できる。レギーネは男爵の城からやってきた。そこにまたもどっていくのだ。

竹風日訳は原作とほとんど同じだ。1カ所(傍点筆者。以下同じ)を除いては。

【竹風】大罪悪を犯した賃金を貰つて、百合が踵を返したとき、既や殷殷たる砲弾の響きは城内に起つて、太鼓の音、硝煙の電、主客相搏(う)つ大叫喚は手に取るやうに聞えて、不意討を喰つた普国兵が無念の悲鳴は殊に百合の耳を貫いたであらう。百合は恐しさ怖さに身も顛へて、夢中に走つて帰つたのであらう。269-270頁

百合がフランス兵を案内し終わったあとの出来事だ。注目点は竹風が加えた「城内」である。不意打ちの場所を竹風は「城内」だと書いた。原作にはない。不必要な加筆だ。書き加えるならばせめて「村外れ」であればまだよかつた。

この「城内」が呉構を惑わした。先に「砂田

城攻撃」という表現もあつた。それを合わせて竹風日訳に出てくる「城」はすなわち砂田城だと思ひ込んだ。「城内」だから男爵の居住する城の内部で戦闘が発生したことになる。

【呉構】及至受了那錢袋。欧麗返身回家。已聽見城裏火光冲天。砲声震地。両国の兵。戦闘呐喊。後來德国兵打敗。悲喚哀鳴。欧麗想早已嚇得魂不附体。126頁

あの錢袋を受け取るとユリは身を翻して家にもどろうとした時、城内で火の手が天を衝き、砲声が地面を揺るがし、両国の兵が闘い大声で叫び、後にドイツ兵が負けて悲鳴をあげるのが聞こえた。ユリはもうびっくりして肝がつぶれた。

「錢袋」とはフランス兵を手引きした百合への報奨金だ。呉構の矛盾、勘違いは百合が家に帰る(回家)を上「城裏」とは別の場所としたところからもわかる。百合が帰るべき先は男爵のいる城だ。その城が戦場になるのは矛盾する。

不合理さは別の個所で加筆した部分においてさらに露わになる。呉構にしては珍しい誤解のくり返しだと感じる。

#### 百合の証言という加筆——呉構の誤解2

呉構はこの猫橋事件にこだわった。後の第13回において竹風日訳にはない大幅な書き加えをして事件を蒸し返す(146-148頁)。呉構の創作である。

フランスの羅徳(ラツール)大佐(羅斯忒參將)がやって来た。フランス兵の司令官だ。大佐の名前は竹風日訳に出てくる。約西(ヤスマサ)が「お前は彼らを城に案内してどこに行ったのか(你領他們進城。到什麼地方呢)」(147頁)と欧麗(ユリ)に問う。ここからすでに誤っている。

【吳禱】只得出去。領他們過得猫橋。到了城門外邊。法兵不許我進城。那時城裏也是法兵。城外也是法兵。真是進退兩難。急得要死。躲在樹林叢中。一声也不敢響。147頁

しかたなく出かけて彼らを案内して猫橋を抜けて城門の外につきました。フランス兵は私が城に入るのを許しません。その時、城の中もフランス兵で城の外もフランス兵です。本当に進退窮まってとても焦りました。林の茂みに身を隠して一声もよう上げませんでした。

猫橋を抜けて城の入り口の外についたという。方向が逆だ。しかも城の内外がフランス兵であふれているというのはどういうことか。竹風日訳に城がフランス兵に占領されたという個所があった。吳禱にはその記憶が混入してこういう矛盾した記述になったらしい。プロシア兵の背後を撃つはずだったではないか。その兵はどこにいるのか。不思議に思わなかったのか。ここを理解するのはむづかしい。

茂みに隠れていたところをフランス兵に見つかりスパイだということで切り殺されかけた。しかし右肩に白十字を縫いつけた黒い衣裳を着ていたためフランスの味方だと認定された。その黒衣裳は砂田男爵が百合に着させたものだ。フランス兵が行ったあと茂みに隠れている時だった。

【吳禱】只聽得城裏一片吶喊槍砲之聲。像是我們德国兵。和法兵兩面交戰模樣。又看見火光融融。照到半天裏。我想這種情景。老主人在家。定要遇難。放心不下一团勇氣。也管不得法兵不法兵。拔起身來。望城裏就走。城門口無數法兵守着。因見我穿着黒衣記号。果然並不阻攔我。我一直跑到這裏。只見你家左近一箇法兵也沒有。依旧和太平無事一般。毫不像外邊有什麼乱事。老主人

安然在屋裏踱來踱去。正在想什麼念頭。我剛要進門。只見那箇法国兵官。立在門外。遞給我那箇錢袋。147-148頁

城内いっばいに大きな叫び声、銃砲の音が聞こえまして、我々がドイツ兵とフランス兵の双方が交戦している様子です。さらに火の手が赤々と中空を照らすのが見えます。私はこうなると大旦那様はきっと危険な目にあっておられると思ひまして心配で、勇気を振り絞ってフランス兵であろうがなかろうがかまわないと考え、起きあがると城へと行きました。城門には無数のフランス兵が警護していましたが私が記号のある黒い衣裳を着ているのを見るとまったく妨げようとはしませんでした。私がここに走りついてみると若旦那様の家の付近にはひとりのフランス兵もおらず、昔ながらの平和で外の騒乱は嘘のよう。大旦那様は平穩に、何かお考えのようで部屋の中を行ったり来たりしておいでです。私が入ろうとするとあのフランス士官が入り口の外に立ってまして、私にあの錢袋を手渡したのでした。

城の内外はフランス兵だと言っていた。ところがいつの間にやらドイツ兵が出現して戦っている。戦闘の真っ最中だというのに城門にフランス兵が一杯になって何もしていないというのもおかしい。しかも男爵の居場所は城内のはずなのに戦闘とは関係なく平穩無事だ。報奨金はすでに受け取っている。それにもかかわらずフランス士官がまたも百合に錢袋を手渡した。不思議な説明である。

城から猫橋を抜けてプロシア兵の背後を襲った。その事実が重要であって位置関係に取り違えがあっても小さい問題だと考える人もいるだろう。しかし吳禱の日本語理解力はかなり高いと筆者は思っている。小さい勘違いかもしれないが前後で辻褄が合わないのは、やはり不適切

だ。

猫橋で事件が起きたのは7年前である。それ以来、男爵はフランスにドイツを売った賣国奴と罵られることになった。砂田保正がなぜ山園という偽名を使用しているのかという謎解きだ。賣国奴の子であることを隠すためだった。

男爵は村民から犬畜生と徹底的に憎まれる。城島の屋敷が焼き払われた。そうして23日前に男爵は急死して教会での埋葬が牧師によって拒否されているという状況だ。そこに帰還したのが男爵の息子保正である。

原作では男爵が倒れたとき村の指物師(棺桶も作る)の娘レギーネと一緒にいたことを述べる。だが竹風はそこを翻訳しなかった。ゆえに男爵の召使い、奴隷で同時に愛人を兼ねていたレギーネが竹風日記に登場するのは少し後になる。

### 百合(レギーネ)の登場

保正の同郷人で彼をとりまく人物の中に親しかった女性がいる。老僧(牧師)の娘ヘレネ(Herene/藤子ふちこ/福美)だ。保正が賣国奴の子になってから藤子は彼との交際を断わってきた。

男性の知り合いは宿屋の息子フェリックス(Felix/目賀田利吉めかたりきち/梅克戴黎克)である。長じて保正を目の敵にした。父は村長になる。

保正および藤子と利吉の人間関係について作品は多くの紙幅を割き記述する。しかし藤子と利吉は物語の脇役にすぎない。

レギーネ(Regine/百合ゆり/欧麗)こそが物語のもうひとりの主人公だ。すでに出てきている。本稿では保正と百合の関係を中心に述べる。

竹風日記に百合が最初に出てくる場面を示す。藤子が保正に会ったとき故郷の消息を伝えた。例の「猫橋事件」を説明している。

【竹風】……手紙の趣に由りますとね、貴君のお父さんが暗夜霧のあるときね、仏蘭西兵の手引をなすつて、あの猫橋ね、あれを通らして、独逸軍の不意討をなすつたんですつて。それからね、あの指物屋の娘で百合といふ子があつたでせう、あのほら。絨毛(ちづれつけ)の、小柄の、学校に一所に往つたでせう、あの百合が、まあ、道案内をしたんですと。それでね、世間ではもう、お父さんのことを、賣国奴だ人非人だと言つて、お父さんのお仕事をするものも無いし、今に御邸に火を放けるつて、大騒動なんですと。39-40頁

文体からして藤子が保正に直接話して聞かせたのだとわかる。

猫橋が出てきた。フランス軍を導き猫橋を抜けてドイツ軍の背後に案内したのは顔なじみの百合だという。それを命じたのは保正の父砂田男爵だ。上記の「あの指物屋の娘で百合といふ子」から「学校に一所に往つたでせう」は見知った百合についての説明であることは明らかだ。「お父さんのお仕事をするものも無いし」とは屋敷の仕事を引き受ける村民は誰もいない、つまり村民は賣国奴の男爵を見放し、一切の協力をしないという意味。これには後の男爵葬儀も含まれる。当時は屋敷に放火するぞと村人が大騒ぎをしている。

次に示す呉禱漢訳は藤子が保正へあてた書付に変更してある。ゆえに竹風のような口語ではない。また中には勘違いが混じる。

【呉禱】……蓋據家郷來信。言令尊於某日黑夜烟霧漫天時。為仏蘭西兵内応之郷[嚮]導。引敵偷渡猫橋。出我兵之不意。大肆掩襲。蓋城中有木器舖主人之女名欧麗者。其髮拳。其人似孩童。由隧道潜往一学校之旁。欧麗即受雇引導者也。外間偵悉此事。皆話令尊為賣国奴。与禽獸無異。惟妹意令尊當

不至有此事。今尊邸亦被火焚。同付一燼。  
城中騒乱不堪。21頁

国元からの手紙によりますと、あなたのお父さんがある日の暗夜、霧がたちこめた時に、フランス兵に内通し敵を手引きしてこっそり猫橋を渡らせ、我が兵の不意を打って大いに急襲したといえます。城には家具屋の娘でユリという名前の、巻き髪で子供のような者がいて、トンネルを抜けて学校のそばを秘かに行かせるのにそのユリが雇われて道案内人になったそうです。世間ではそれが知られると皆はあなたのお父さんを賣国奴、禽獣と違わないと非難しています。しかし私はあなたのお父さんがそのようなことをなされたとは思いません。今はお屋敷も焼かれ燃え尽きて、お城は大騒ぎです。

竹風は「指物屋」と書いている。指物師で棺桶も作っているのが百合の父親だ。家具大工だと考えれば「木器舗」すなわち家具屋でもかまわない。しかし別の箇所(30頁)で「木工師」と漢訳しているから統一するほうがよかった。

呉禱漢訳は竹風日訳にもとづいている。それは確かだ。しかし下線部分的に誤解がある。

竹風日訳にある「学校に一所に往つた」前後は百合の過去についての説明だとくり返す。保正と藤子は子供の頃より百合と顔見知りだった。その説明を呉禱は「猫橋事件」当日のことだと受け取った。だから「学校に一所に往つた」では具合が悪い。「由隧道潜往一学校之旁(トンネルを抜けて学校のそばを秘かに行かせる)」と書き換えて不意打ちの道順のように漢訳した。もともとトンネルは存在しない。

「お父さんのお仕事をするものも無いし」も屋敷の炎上\*24についても元の竹風日訳からは少し外れている。ただし猫橋に案内したのは百合であったという部分は正しい。漢訳に小さな誤解はあっても清末民初の読者は受け入れるだけ。

比較の手段を持たないから気にしなかっただろう。

竹風はゾーダーマン原作の細部を削除しながら大筋を把握して抄訳している。その中から百合が出てくる部分をいくつか拾い上げる。

#### 百合と褒賞金——解釈はひとつではない

保正は父親の死去を知り故郷の砂田村にもどった。指物師が掲げる棺桶の看板を目にしてその娘百合を思い出す。

【竹風】嗚呼その時のあの娘が、仏蘭西兵を手引したばかりでなく、父の最後まで城中に住んで、父にかしづいたとは、何とした不思議な事であらうと男爵は思案に暮れた。56頁

【呉禱】須知從前的歐麗。那裏會做法蘭西兵的内応嚮導。後來不知怎樣。住在城中。和他父親連[聯絡]一氣。纔受他父親使喚。替他父親幫忙。實在奇怪。想不出箇道理。31頁

なんとあの時のユリが、どうしてフランス兵に内通し手引きすることになったのか、後にはなぜだか城中に住んで父親と気脈を通じ、父親に使われ、父親の世話をするなど、実に奇妙なことでわけがわからなかった。

竹風日訳にある「男爵」は保正を指す。百合についての消息は部分的に提示される。竹風日訳では藤子が故郷からの便りの中で紹介するのが最初だった。子供の頃の知り合いだといっても男爵の息子と指物師の娘だ。本来は人的関係など生じるはずもない。ましてや百合が男爵の屋敷に入ったのは保正が故郷を離れて叔母の家へ移ってからだ。「猫橋事件」が起きたといっても噂に聞くのみ。保正が屋敷の内情を知らないのも無理はない。それでも伝わってきた消息によれば事件後は屋敷に男爵がひとりだけ居住

し百合が世話をしているという。読者は伝聞からはじまって徐々に詳しい内容を知るという段取りである。

保正は焼け落ちた自分の屋敷にもどって来た。庭で穴を掘っている女性がいる。百合である。その穴は遺骸を収納するためのものだった。教会の牧師(ヘレネの父親)がありえないことに男爵の遺体埋葬を拒否したからだ。村民らもそれに同調している。それほどの賣国奴というわけだ。

こうして焼け残った家屋で保正と百合の不可思議な生活が始まった。

保正は百合にそれまでの経緯を問うた。百合が答えて、男爵の屋敷に来たのは指物師である父に命令されたからだ。すなわち父親に捨てられた。15歳の時だった。そこにフランス兵がやってきた。男爵の命令で百合はフランス兵を猫橋に案内した。その時案内賃としてもらった大金は百合の父が持って行ってしまった。

大金について百合は次のように返答した。竹風日訳である。

【竹風】父が取つてしまいましたのでございます。父はそんな事とは露存じませんで、全く私の身を汚された、不義賃と思つて居りましたので、直ぐと持て参りましたが、手に余る程の金貨でございました。67頁

竹風は「全く私の身を汚された、不義賃」と書いた。「父はそんな事とは露存じませんで」とあわせ考えれば、与えられた大金はフランス兵を案内した報酬ではないことになる。父親は百合が男爵家に拘束のうえ召使い、奴隸、愛人にされた不道德な代金だと考えて持ち去った。敵兵を案内した「汚れた金」とする原作とは異なる。この呉構漢訳はさらに不思議なものだ。

【呉構】那箇我絲毫也不知道。人家全然推在我身上。我想這種不義之財。誰要拿他。

我家也很有些金錢哩。36頁

それ(金額)については私は少しも知りません。人が私に押し付けたものです。私はこんな汚らわしい金など誰がもらうもんかと思ったのです。私の家にもお金はありますから。

まず百合の父親が出てこない。父親が持って行っていないのならその大金はどうなったのかと疑問が生じるが答えていない。おまけに自分の家に金があるというのは百合の台詞としては怪しい。まるで男爵家と自分を一体化しているように読める。事実として男爵を養うために百合は屋敷の金を使用しているにしてもだ。

### 男爵と百合

「猫橋事件」後、男爵家の使用人は百合を除いて誰もいなくなった。村人は通りで百合を見つけると殴りかかる、石を投げつける。それを避けて遠方まで足を運んで食料を高値で購入せざるをえない。そういうことならどうして屋敷を出て他所へ行かなかったのかと保正が質問する。「それでは先の御前様が、飢死を遊ばしたろうではございませんか(71頁)(這樣。老主人不要餓死了麼(37頁))」というのが百合の返事だった。

父親に捨てられた百合には行き場所がない。そういう考え方もある。しかし単なる召使い、奴隸であればそうまでして世話をする必要も義務もない。屋敷の金を持ち出して逃亡すればよい。男爵を飢え死にさせるわけにはいかない、という百合の言葉には内実はそれだけの関係ではないことを暗示する。あくまでも暗示であって明記しない。竹風は性的表現を避ける傾向がある(後述)。

原作では次のようになっている。「『ぢやあ、あの方を飢え死させるんですか』と女が聞いた。――さうして不意に真赤になつた。さうして慄々(をどをど)心配さうにつけ足した。『殿

様を』」(豊隆訳87頁)。竹風は「不意に真赤になった」という個所を省略したから百合の心情が見えなくなった。

### 保正の百合に対する心情の変化

百合ひとりで男爵を埋葬するという。それを聞いた保正が賞賛の気持ちを抱く。

【竹風】御前様の唇には、賞讃の言葉が浮かんだ。嗚呼、この世にも珍しい忠実——何の躊躇もなく、何の憚るところもなく、唯、その御主のために、千度百度も死地に入つて、怨む気色も見えない、この忠実は、たしかに賞讃の価を有して居る。その忠義に免じて、父を葬るまでは、此處に留め置いてやらうと、保正は心を決した。76-77頁

「御前様」は保正を指す。保正は百合が持つ無私の忠実さを賞賛する。埋葬が終わるまで百合が屋敷内に居住することを許すことにした。

【吳禱】約西聴罷。心裏称讚不已。暗想這等忠心誠實的人。世間实在難找……他也不疑心。也不害怕。為了主人盡心竭力。千回百回。入了死地。一些也沒有怨恨。如今還要代我埋葬父親。還在這裏並不拋丟而去。39頁

ヤスマサは聞き終わると心の中で賞賛してやまなかつた。これほどの忠実な人間は世間には実に得難いとひそかに思った。……彼女は疑わないし恐れもしない。主人のために全力をつくし、何度も死地に入って少しも恨まない。今は俺に代わって父親を埋葬したい、ここにいて決して置き去りにほしくないという。

竹風が施した「——」に吳禱は「……」を当てて記号を合わせている。彼が下線部で勘違い

した理由は簡単だ。日本語の「此處に留め置いてやらうと」の主語が保正であることを把握しそこなったからである。「保正は心を決した」と明示されている。不思議なことになぜだか訳文の後半は百合が主体で記述されていると思った。細かなことに違いない。そこ以外の漢訳は正しい。

父親の葬儀は砂田の牧師と村民から拒否されている。保正はしかたなく灰出村にいる軍仲間と義兄弟の谷口(エンゲルベルト Engelbert/檀柯)たちに来てもらい大騒動のなかで埋葬を執り行なつた。それがすめば百合の扱いが問題になる。用済みだとして城から追い出す考えもある。それを悟つた百合が問う。

【竹風】「あの、私は此城を出ますんでございますか。」と問うた。心配と苦痛とに色蒼ざめた顔は、血に染んで凄いと美しい。142頁

保正が百合のことを「美しい」と記述するのだ。ただの邪魔者扱いではなくなっている。小さな表現が積み重なっていく。

【吳禱】問道。我不是出了城的麼。約西看他臉色。帶白轉青。又焦急又苦痛的模樣。及至約西对着他看。立刻又轉了飛紅。不肯擡頭正視。68頁

私は城を出るのではないのですか、と問うた。ヤスマサが彼女の顔を見れば白から青に転じ、焦りと苦痛の様子がある。ヤスマサが彼女を見ているのですぐに顔を赤らめ、頭をあげて正視しなかつた。

吳禱は竹風の「すぐに顔を赤らめ(立刻又転了飛紅)」は漢訳した。しかし肝心の「凄いと美しい」を訳していない。保正の心情が変わつたことを取り落とした。

竹風日訳にはその後ろにもうひとつ「美しい」



が出てくる。他所へ行けばいいだろうという保正の問いかけに次のように百合は答える。

【竹風】「他とは何處へ参るのでございます。」／再び心配の色はその美しい面に浮ぶ。142頁

【吳禱】別處。到那裏去呢。臉上更為凄切。那種景色。實在叫人可憐。69頁

他所とはどこへ参るのでございます。顔はさらに物悲しくなりその様子は実に憐れを感じさせる。

竹風にある「美しい」という言葉には意味がある。保正の百合に対する感情、すなわちただの召使い、奴隸であったものがこの瞬間に変容したことを示唆する。

吳禱漢訳の「可憐」では近いが読者に訴える力が弱い。「美しい」に該当する単語がないからその転変を感じ取ることができない。ただし次の個所があるから読者は理解するだろう。百合は城を追い出されたら濠に身を投げて死ぬという。

【竹風】百合はいかに鈍で、いかに無作法な女であらうとも、彼は遂にこの世界に於て、保正が唯一の味方ではないか。／保正は遂に百合を城外に放逐するのを断念した。143頁

【吳禱】咳。這歐麗本是一箇愚鈍不知道理之女。却能恁地幫助約西。任你苦到怎樣。他依旧恋恋不捨。看来在當時世界上。除了他。也沒第二箇人是約西的知己了。69頁

ああ、このユリはもとから愚鈍で道理を知らない女ではあるが、そのようにヤスマサを助けることができ、どのように苦しい目に会おうとも彼女は変わらずに捨てようとはしない。考えれば当時の世界において彼女を除いてはヤスマサを知る者はいないのである。

保正にとって百合は唯一無二の存在になった。吳禱は上記竹風日訳の後半部分「……放逐するのを断念した」は省略した。

保正と百合は同居しながら最初はほとんど口をきかない。主人と奴隸という設定だから百合は保正を避ける傾向に置いてある。両者の関係が変わるというのが先に示した保正の言葉「美しい」であったりする。きわめて微妙な描写を続けるのがゾーダーマンの筆法である。

そのひとつが竹風の記述する次のような場面だ。夜中に保正は猫橋に立った。そこから川で洗濯している百合を見つける。



口絵 猫橋に立つ保正 洗濯をする百合 署名は「S. W」。渡部審也画という

問いただせば村人の襲撃を避けて夜中に洗いの物をするという。百合が保正に懇願する。村人

を脅すのに鉄砲を撃てばかえって反撃をくらう、それだけはやめてほしい。百合が道理のある発言をするものだから保正は感心した(この部分は呉構漢訳にない)。

【竹風】「成程、其方の言ふ通りだの。では其方に免じて、下の奴等を怒らすことは止さう。」／百合は始めて主人の親切な言葉聞いた。月の光に照らされた、その顔は紅くなつた。156頁

「下の奴等」は村民のこと。「其方に免じて」が意味する「百合のために」という個所が重要だ。主人から思いもかけず我が身を案じる優しい言葉をかけられた。百合はその意外さに感動する。こういう何気ない描写の積み重ねが両者の変化を表わしている。

ところが呉構漢訳ではそうっていない。少し前の、鉄砲を撃ってくれるなど百合が懇願する部分から怪しげなことになる。竹風日訳と呉構漢訳を対比対照してその食い違いを示す。

【竹風】御前様が鉄砲をお放ち遊ばしますと、下の者までがいつ何時でも鉄砲を持つて居るやうになりますから、私がお城の外へ出ますと、直に撃ち殺され了(ちま)ひませう。私はまたお城の外へ参らない訳には参りません。155頁

保正が百合の身を案じて鉄砲を持ち出せば、それが逆に村民の暴力を引き出すことになる。手を出さないでほしい。城外へ買い物に行かなければ日常の生活が維持できない。死活問題だという説明だ。百合の話はもっともなことである。保正が百合の理屈の通った返答に「不思議の感に打たれた」(156頁)のも当然だろう。

竹風の日本語訳文はむつかしい部分はない。普通の日本語だ。呉構にしてみれば何の問題もないと思われた。しかしなぜだか訳文に関係な

く作文して迷走する。どうやら呉構は上の後半部分の漢字を拾ったらしい。鉄砲、城、外、出、撃、殺、了などだ。

【呉構】……他們帶着手槍。偏偏不打別人。只要找我。單苦我不出城。我想我橫豎顧不到你。不如我出了城。讓他們打死了。也罷哩。73頁

……奴らが鉄砲を持つのは別人を打とうとしているのではなくて私だけを探して、私が城から出ないように苦しめているだけなのです。私がどのみち御前様のご面倒を見ることができなければ、城を出て行って彼らに殺された方がいいかもしれないと思います。

百合は保正に仕えるためにあくまでも城の外へ出て物資を購入しなければならない。また彼女にはそうしようという強い意志がある。それが竹風日訳だ。自分が殺されないようにするために鉄砲は使ってくれるなどという要望なのだ。それを呉構漢訳では百合が絶望して自棄を起こしてしまった。これでは保正も何のことかわからない。混乱に拍車がかかる。

【呉構】照你說來。我把你調開到別處去。他們再不至和你為仇了。歐麗怨声怨氣道。你調我到別處去。是什麼意思呢。73-74頁

お前の言うとおりで俺がお前を別の場所にやれば、奴らはもうお前の敵ではなくなるな。ユリは不満らしく言う。私を他所にやるとはどういう意味でございますか。

「百合のために」対策を練るというのは共通する。そこはいい。保正は百合を守るために村人を怒らせる鉄砲は使わないと了承しただけだ。それですむ話にすぎない。だから呉構が「我把你調開到別處去(俺がお前を別の場所にやれば)」などと加筆したのは不必要だ。前部が間

違っているから後部とのつじつまがあわない。

また竹風日訳の「始めて主人の親切な言葉を聞いた」「その顔は紅くなつた」(156頁)を漢訳しなかった。清末民初の読者にとってヤスマサとユリの関係がはっきりしない。

呉禱漢訳は基本的に日訳に忠実だ。ゆえに上のような齟齬をきたす部分があるとかえって目立つ。

ただし竹風日訳にあるがまを呉禱は漢訳して次のようにもある。保正が百合に、話をしないのは嫌ったり憎んだりしているわけではないと慰める場面だ。「百合はハラハラと涙を翻(こぼ)した」(157頁)を「欧麗不言不語。已簌簌掉下淚来(ユリは何も言わずにハラハラと涙をこぼした)」(74頁)と漢訳して正しい。

### 百合の表情

竹風日訳には恋愛感情をあからさまに描写する箇所は多くない。保正はわずかに「美しい」と思う。百合については「顔は紅くなつた」くらいのもの。ほのめかすという表現が妥当だ。竹風日訳ではそういう作風の物語である。

保正は百合が冬着を持たないのを見て「其方が凍えては俺が済まん」(177頁)「你凍了。我可不管(お前が凍えては俺がどうして知らん顔をできるか)」(84頁)という。

【竹風】百合は何とか言はうとしたが、言葉が口に出ない、顔は紅くなつた。177頁

【呉禱】欧麗默然不答。臉上起了一陣飛紅。84頁

ユリは黙ったまま答えず、顔をさっと赤らめた。

顔を赤らめるのがユリの喜びを表現する。それが愛情に結びついている。

保正が百合の容貌を見直す場面がある。買出しからようやく帰ってきた。夕食の給仕をする彼女は新しい上着を着ていた。その姿を見て保

正が思う。

【竹風】洋燈の傘の間から百合の姿を垣間見た保正は、さすがに吃驚したのである。まるでその人とは思はれぬばかり、気品も備はつて、眩いほど美しい。彼女はもはや汚ない浅間しい下婢では無いのである。その挙動の高尚さは貴婦人といつても恥かしくないほどで、媚を含んだその容貌は生れ変つたかのやう。げに馬子にも衣裳とやら、況して百合は天性の麗質。今までの汚ない衣を脱ぎ棄て、今宵を晴れと着飾つた新粧には、表衣一枚は廉いものである。181-182頁

保正が今まで見ていた百合は「汚ない浅間しい下婢」だったということだ。見直してそこにいるのは「天性の麗質」を備えた百合である。「晴れ(ハレ)」は非日常を意味する。ここでは「晴れ着」を日常(ケ)に着用したことになる。「馬子にも衣裳」とともに竹風の表現であって原作にはもちろん存在しない。

【呉禱】話説約西燈光之下。見了欧麗面貌。你道怎的要驚呢。原来欧麗這時的顔色風采。全然變了様子。和前幾天大不相同。好似換了一副骨相。又有豊情。又有気格。可當得秀麗二字。一些也不含糊。兀的闌珊疲闌的下婢。那模樣竟變成高尚美妙的婦人。看哪。欧麗生来本非陋質。如今脱却旧服。換了新衣。今宵又闌起新妝。披上外套。三日不見。怎不教人刮目相看呢。86頁

さてヤスマサが灯りのもとでユリの姿を見てなんと驚いたことか。ユリのこの時の表情風采はまったく変わっていた。数日前とは大いに異なりまるで人品が入れ替わったように感情豊かで気品もある。まさに秀麗という2文字が当てはまり、いささかのあいまいさもない。あのように落ちぶれて

下卑た下女だったものが高尚で美妙な婦人  
に変わったのだ。御覧じろ。ユリは生まれ  
つき悪い資質ではない。今は古い服を脱ぎ  
捨て新しい衣裳に着替えた。今宵はさらに  
新しく着飾り上着もおっている。3日会  
わなければ別人で、感動しないわけがない。

竹風日記にほぼ沿った漢訳だ。竹風が使用し  
た日本語表現は省略した。

百合の相貌が変化していることが保正の意識  
を動かす。召使い、奴隷という位置からの脱皮  
といってもいい。

百合の「赤くなる」がここでも出現する。百  
合は保正に褒めてもらいたかった。

【竹風】『其方は新らしい衣裳を着て嬉し  
いかね。』／云つて欲しい事をきつぱり言  
ひ當てられたので、百合は頸の辺まで紅く  
した。182-183頁

【呉禱】你可是穿了新衣裳歡喜麼。不料這  
句話。說得歐麗從額角上起。直到頸邊。都  
紅了起來。87頁

お前は新しい衣裳を着て嬉しいか。この  
予期しない言葉にユリは額の端から頸のあ  
たりまで赤くした。

竹風がせっかく「云つて欲しい事をきつぱり  
言ひ當てられたので」と訳している。褒めても  
らいたかったのが実現したという意味だ。それ  
を呉禱は「不料這句話(この予期しない言葉)」  
としたのは間違いになる。それ以外の部分(重  
要な百合が「赤くなる」)が忠実な漢訳になっ  
ているから惜しいと思う。

保正は百合との会話のなかで回想する。子供  
の頃に百合に何か与えたものはないかと質問し  
た。

【竹風】百合は火のやうに紅くなつて、…  
…191頁

【呉禱】歐麗漲紅了臉。……89頁  
ユリは顔を真っ赤にして、……

百合が赤くなるのを積み重ねていく。あくま  
でも控えめである。

### 性的表現の抑制、削除

先に清末民初の読者にとって、保正と百合の  
関係がわかりにくいと書いた。ふたりが精神的  
に徐々に接近していく様子をゆるゆると記述し  
ている。そういう原作だからなおさらだ。加え  
て竹風は性的表現の暗示、描写をなるべく避け  
て翻訳した。読者はますます理解がしにくいこ  
とになる。

百合は保正の父親砂田男爵に仕えていた。召  
使い、奴隷である。しかしそればかりか愛人でも  
あった。それを垣間見せる部分が原作にはある。

保正は百合に以前はどこで寝ていたのかと問  
うた。その答えは次のとおり。「女は慄々した  
眼つきを天井のある寝台の方へ投げた。『貴方  
は御存知でございませう』と女は口籠つた。夫  
から耻かしさに押しつぶされて女は両手を顔へ  
當てた。／勿論彼は知つてゐた。——唯一の瞬間  
でも夫を忘れることが出来たなら！」(豊隆  
訳243頁。「天井」とは天蓋のこと)

百合は男爵と寝台を共にしていた。ここの暗  
示は誰にでも理解できる。ところが竹風日記で  
はその部分を削除した(185頁)。日記にない  
から呉禱漢訳にも当然存在しない(88頁)。

保正は百合に「猫橋事件」の後に起こった火  
災の夜について問うた。百合は証言を拒否した。  
保正は怒り百合につかみかかる。ふたりは揉み  
合う。原作では『俺は女の絞め殺さうとするの  
か、夫ともキスをしやうとするのか』(豊隆訳  
371頁)が挿入されている。つかみ合いの最中  
のことだ。「彼は溜息と共に女の方へ屈んだ。  
さうして——女の口の上にキツスした。／女は  
声高く悲鳴を上げた、彼に噛りついた、さうし

て自分の歯を彼の唇の中に噛み込んだ」(豊隆訳373頁)

竹風はこの引用部分を見捨てた。底本にないから呉禱も漢訳しようがない。性的表現が消去されたからただのケンカで終了してしまった。

保正は牧師の娘藤子に未練を残しながら百合をおいて砂田城を出た。彼がポーランドの一僻村からもどってきたのはそれから3ヵ月後のことだ。ナポレオンがエルバ島から脱出したからプロシア軍人に徴集令が発令されていた。保正は上官として兵士に集合を命令する。村長の息子利吉は上官の保正に盾をついた。保正は彼を刀で制裁したうえに拘束した。そのうち出征までの数時間前に保正は百合と会った。旦那様の帰還を待ち続けていたという百合と綺麗に手入れされた花園を歩く。

【竹風】……(保正が)横から百合を眺むると両の頬には曇が懸つて、憐れな面影が見えながら、覆へども覆はれざる心の嬉しさは、見る見る雲を破つて顔一面の薄紅。  
314頁

【呉禱】只向著欧麗呆看。欧麗自己也覺好笑。禁不住臉上起了一陣微紅。145-146頁  
(ヤスマサが)ユリの方をぼんやり見ると、ユリもおかしいらしく思わず顔がさつと赤くなった。

百合は保正に褒められて喜びを感じる。顔が赤くなるのは百合の自然な愛情表現だ。

ふたりの関係はそれで終了する。結局のところ性的な結びつきはない。いわば精神的恋愛のままなのだ。主人と召使い、奴隷というだけ。百合は父男爵の愛人だったが、保正はそれにも至らない。

### 百合が父親に殺される

保正が藤子の手紙に誘われて外出するという。百合は本能的に危険と不安を感じて激しく反対

した。保正はそれを見捨てて藤子に会いに行った(呉禱はふたりの関係についての長い説明を加筆している。166-169頁)。事件が起こったのはその後のことだ。村長は息子利吉が保正によって痛めつけられたばかりか軍法会議にかけられることに怨みを抱いた。村長は百合の父茂助を扇動して保正を射撃させようと猫橋へ追い立てた。猫橋で保正の帰りを待っていた百合は父親の銃弾に射貫かれて川に転落した。戻ってきた保正は川から百合の遺体を引き上げ屋敷の庭に埋葬したのだった。百合が男爵のために掘っていたあの穴である。

保正は百合のことを考えた。

【竹風】彼は曲らず、拗戻(くね)らざる天衣無縫の自然児の一人であつた。炉辺の哲学、人為の法則等が、未だその勢を逞うせざる大昔の樂園にのみ育つべかりし自然生は、百合の一生にも譬へられるやうである。何人にも妨げられず、何者にも強ひらるゝことなく、善にもあれ、悪にもあれ、唯々自然と同化する児童の天真爛漫は、また百合の一生涯であらう。379-380頁

【呉禱】他意志既没有什麼堅強。本心也沒有什麼軟弱。是天生就一團天真爛漫之氣。也不知有善。也不知有惡也。不知有高也。也不知有低。但随着心之所之。快快乐樂的過。好如初出懷胎的嬰兒。古語道得好。人之初。性本善。他長到偌大年紀。依旧抱着初生的本性。一些也不拋離。外界的境遇人情。一些也不能攙入。這莫說是輕年女子。就是那些英雄豪傑的丈夫。也不容易修練到這箇地步。179頁

彼女の意志は強靱というものでもなかったが、また本心も軟弱というものでもなかった。天然の天真爛漫の氣に満ちており善も悪も、高い低いも知りはない。ただ心のおもむくままに楽しく過ごす。まるで生まれたての嬰兒のようだった。古語にいう

「人の初め、性はもと善」なのだ。彼女は長じていい年齢になっても依然として生まれたままの本性を抱きながらそれから少しも離れようとはしなかったし外界の境遇交際はまったく介入することができなかった。これは年若い女子はいうにおよばず、英雄豪傑の男子でさえ容易にたどりつく境地ではなかった。

百合が天然の天真爛漫さを持っていたことを指摘する。いわば自然児ということだ。呉禱漢訳は直訳にはなっていない。しかし竹風日記の意味は把握している。

保正は百合を埋葬し終わった。灰出村から兵士たちが彼の指揮を受けるためにやってくる。保正は彼らと砂田村の兵士を率いてそのまま出征していった。噂によれば彼は里具泥(リグニー Ligny/利吉尼)の戦争で戦死したらしい。

『賣国奴』はこうして完結した。

## 5 呉禱による文末の加筆

ところが呉禱はそれで終わらせなかった。竹風日記ではいくつかの事柄が決着をつけられないまま放置されたと彼は考えたらしい。保正に率いられた兵士たちが出征した後の事情、すなわち後日譚を長々と加筆している(183-188頁)。

その内容をまとめて紹介する(竹風の用語を使用)。

1 利吉は軍法会議にかけられ禁錮10年の罪になるところを保正の取りなしで放免になった。利吉は心を入れ替えた。

2 義兄弟の谷口が保正に過去の事を質問した。なぜご尊父のことを説明してくれなかったのか。とても話せる状況ではなかったから偽名を使っていた。諸君は砂田村での父の葬儀を行ってくれた恩人だ。

3 谷口は百合のことを聞いた。保正は自分の日記を取り出した。それには百合のことが仔

細に記録してある(檀柯一看。乃是日記簿。上面將歐麗的事仔仔細細載明。185頁)。谷口たちは感嘆した。

4 百合の埋葬はどうしたのか。城の庭に一時的に葬っている。将来は教会にある先祖伝来の墓に納めるつもりだ。

5 村長は息子の利吉が軍法会議でどうなったか心配した。人を遣って探らせると保正が救ってくれたことを知った。村長は保正に感謝した。

6 教会の牧師が村長を呼んで相談した。娘の藤子が利吉と結婚したいという。利吉が戦争から帰ってからの話にする。後にそのとおりになった。

7 娘の百合を射殺した茂助は後悔から恐怖を感じ発狂してしまった。牧師は彼を精神病院へ送り店は閉めさせた。茂助は病院で一生を過ごした。

前に示したリグニー(リニー)の戦争部分を竹風日記から引用する。物語の締めくくりである。

【竹風】恐らくは、里具泥の戦争で名誉の戦死を遂げたのであらう、と云ふ噂である。  
390頁

リニーの戦いとは1815年6月16日にナポレオンがドイツ軍と戦い最後に勝利した戦争だ。保正はそこで戦死したという風の便りである。原作は「彼はリニーで戦死したと云ふ噂である(Bei Ligny soll er gefalledn sein.)」(豊隆訳508頁。マーシャル英訳は“*It is supposed that he fell at Ligny.*”)だ。物語は突然断ち切られたように終了する。それが作品の余韻をかもし出す。

しかし呉禱漢訳はそのようには終わらせない。上に見ているように補足がつづいている。保正の戦死についても同様だ。

【吳禱】且説約西和檀柯等効力沙場。積得戰功不小。這時德国的後備軍。在欧洲很有些声名。不料有一次德法两国。在利古尼地方交戰。欧洲歴史上很有名的。称利古尼戰爭。約西出於意外。竟在槍砲裏頭。力戰陣亡。可知約西今番出門。早已立定主意。預備馬革裹尸。断不願生還鄉里。188頁

さてヤスマサとタングチらは戦場で尽力し、その積んだ戦功は小さいものではなかった。その時、ドイツの後備軍は欧洲にあつて名声を高めていた。はからずもドイツ、フランス两国はリグニーにおいて交戦した。欧洲歴史上に有名なリグニー戦争という。ヤスマサには意外なことだったが、銃砲のなかで奮戦して戦死した。ヤスマサは今度の出征にあたり早くから考えを定めていたことが知られる。戦死するつもりで、生還することは断じて願わなかったのだ。

竹風日記では噂だった。しかし吳禱は実際に見て来たような説明をした。しかも保正の死の決意までも追加している。

加筆は続く。

8 谷口と利吉は保正の遺骸を探し出し回収し、砂田城に運んだ。牧師は正式な葬礼を執り行ない先祖の墳墓に葬った。村長を先頭にして砂田村民は彼を祭った。

9 谷口は保正が百合のことを記述した日記を取りだして牧師に渡した。

10 百合の遺骸も砂田家の墳墓に改葬した。

吳禱による以上の加筆は『賣国奴』という作品には不必要なものだ。

吳禱は最後に意外な展開を披露する。筆者が驚き落胆した箇所を示す。

【吳禱】村裏的人。因為敬重欧麗。又湊集了銀錢。替他建造一座極華麗的十字架石碑。由教士將約西日記簿上所載事跡。刻在碑上。以垂久遠。昭示後人。至今遊人到史那特村。

没一箇不訪問欧麗遺跡。到他墳前讀看碑文。行箇追悼礼的。188頁

村の人々はユリに敬意をはらうために金を集めて彼女のためにとても華麗な十字架の石碑を建造した。牧師がヤスマサの日記に記載がある事跡を石碑に刻ませた。永久に残し後人に明示したのである。今にいたるまで遊覧客はスナダ村に来るとユリの遺跡を訪ねない人はひとりもおらず、彼女の墓前に行き碑文を読んで追悼の礼を行なうのだった。

本書の題名『賣国奴』が示している。国を裏切った人物にまつわる物語だ。賣国奴男爵の息子というだけで非難される保正の苦悩と反抗する行動を記述する。召使い、奴隷である百合は賣国行為を実行した女性にほかならない。保正と百合のふたりは「賣国奴」という単語で結びつく。

百合は保正に尽くす無私の存在だ。ふたりの純愛を主題にする小説であつてその背後に「賣国奴」の烙印がついてまわる。ズーダーマンはレギーネ(百合/欧麗)にふさわしい結末を用意した。保正は彼女の遺骸を手厚く心を込めて丁寧に自宅の庭に葬ったのだ。それで十分ではないか。吳禱はなぜそこで踏みとどまらなかったのか。大いに疑問である。

吳禱漢訳にはいくつかの小さな誤訳がある\*25。また吳禱が必要だと考えた個所には加筆もほどこした。「猫橋事件」については位置的勘違いもする。そういう欠陥はあるにしても竹風日記を基本的には忠実になぞっている。そこが吳禱のよいところだと筆者は評価する。

清末民初時期では翻訳に訳者の創作を組み込んだ翻案風の作品も刊行されたことはある。しかし吳禱漢訳はそれらとは違ふと判断している。だからこそ本漢訳にある最後部分の大きな加筆は見逃すことができない。

最後部分に後日譚を付加したのは漢訳として

やりすぎだ。翻訳の基本をはずれるからである。

よりもよって百合の十字架石碑を建てて観光遺跡にするとはどういうことだろうか。呉禱は百合に対して感情的に同情し肩入れしすぎた結果だろう。庭に埋葬された百合をそのままにしておくに忍びなかった。かわいそう過ぎると思ったからだ。それにしても観光名所にするとは。まったく想像をこえる余計な書き加えだ。

呉禱漢訳よりも先行する周氏兄弟の作品に似たものがある。魯迅「斯巴達之魂」(1903)、周作人「侠女奴」(1904)だ。兄魯迅が「斯巴達之魂」で創造したスパルタの女性英雄セレナがいる。スパルタの常識を覆して彼女に自殺させた。それにより魯迅はスパルタの世界を破壊した。弟周作人は漢訳して「アリ・ババ物語」の女奴隷モルギアナに幸福な結末を与えなかった。書き換えて行方不明とした。そうしてアラビアン・ナイトの世界を破壊した\*26。

両作品ともに女性が鍵を握っている。それが原因となって問題が発生した。

呉禱漢訳も女性レギーネが引き金である。呉禱が百合について創作した後日譚は周氏兄弟が行なった作品世界の損壊に匹敵する。 罇

【追記2022.9.17】登張竹風「賣国奴」は雑誌『明星』「連載」の後に金港堂から単行本で出版されたと説明する研究者がいる。楊鳳鳴「近代中国文学翻訳中的日本影響——以呉禱為例」(太原・山西大学碩士論文2014.6.1。8、24頁)および文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』(桂林・広西師範大学出版社2021.6。115、117、206、207頁)だ。『明星』に1回掲載された竹風「賣国奴」は小説の内容を要約した短文である。翻訳全文ではない。『明星』連載後に単行本になったという説明は成立しない。清末小説研究会ウェブサイトで公表した。また別稿を参照されたい。

賣国奴固有名詞対照表 数字は頁数。網羅していない。

原 作	豊 隆	竹 風	呉 禱
Korse	コルシカ人	奈破翁ナポレオン大帝 コルシカ	拿破崙皇帝 科士嘉
Gibraltars	ジブラルタル	ジブラルタル	支伯拉達
Nordkap	ノルドカプ	那威ノルウエイ	瑙威国
Bourbonen	ブルボン		
Robespierres	ロベスピール		
Talleyrands	タレイラン		
Kosaken	コザツク		
Heide	ハイデ村	灰田はいで村	海蝶村
Steinschen	シュタイン		
Dannigkow	ダニコーフ	蓮華寺れんげじ	蓮華寺
Baumgart Boleslav. von Schranden	バウムガルト中尉 ボレスラフ フオン、シユランデン 140	偽名/山園やまざの中尉 砂田すなだ保正やすまさ ×	雅曼 史那特 約西
Platen	ブラーテン		
Litauern	リタウエル人 リタウエン人 410		
Bülowschen	ビューロー		
Marnestrom	マルネ河	園根まるね川/河 219	瑪爾奈河
Weichsel	ワイクセル	和意比世留わいひせる	槐若河
Königsberg	ケーニヒスベルク 16 キョーニクスベルク 38	王城	京城 ×柏林京城 誤り
Karl Engelbert	カール、エンゲルベルト	谷口たにぐち 16,117,131	檀柯
Johann Radtke	ヨハン、ラートケ	世羅せら	薛崙
Felix Merckel	フェリツクス、メルケル	目賀田めかた利吉りさち	梅克戴 黎克



Schranden	シュランデン	砂田すなだ	史拿[那]特
Peter Negenthin	ペーテル、ネゲンテイン		
Masurschen	波蘭土ぼーらんど		
Katzensteg	カッツエンシユテツヒ 22 カッツエンシユテエヒ 197	猫橋ねこぼし 22	猫橋
böhmischen	ボヘミヤ 30		
Arkansas	アルカンサス		
Götz	ギヨツツ 32	老僧らうさう	基督教士
Helene	ヘレネ	藤子ふちこ	福黄
Pregelstrom	プレーゲル 47		
Bonaparte	ボナパルト 48		
Regine	レギーネ	百合ゆり	欧麗
Regine Hackelberg	レギーネ、ハツケルベルク 407		
Latour	ラツール大佐 56	羅徳らとく大佐	羅斯忒 参将
Litauens	リタウエン	一僻村	一箇冷僻の村
		ハムレット 51	
Hans Hackelberg	ハンス、ハツケルベルク	寺島てらしま茂助もすけ 寺嶋茂助 334	穆斯克
Diana	デアアナ 71 デアアーナ 494	デアアナ 59	戴婀娜
Gnäd'ger Junker	Gnädiger Junker 80	御前様 65	小主人
Gnäd'ger Herr	殿様 der Gnädiger Herr		
Herr	Herr		
Bockeldorf	ボツケルドルフ 88	鹿野しかの村	稀客村
von Schön	フォン、シエーン 93		
Amalie	アマリエ 99 アマーリエ 218	女中 竹たけ 324、女中 332	僕婦 徳坤
Marianne	マリアンネ 108		
Hans Eberhard von Schranden	男爵ハンス、エーベルハルト、 フォン、シュランデン	男爵砂田すなだ正猛まさたけ	男爵史那特 嗎達
Sellenthinschen Schwadron	ゼレンテイン中隊 138		
Grafen Dohna	ドーナ伯爵 146		
Madonna	マドンナ 194		
Hagars	ハガール 197		
Furien	フーリエ神 205		
Hoffmann	ホツフマン 216		
Weichert	ワツイヒエルト 217		
Kazabeika	カツアベイカ 238		
Evastochter	イヴの娘 239		
Sultan	スルタン 262/犬		
v. Krotkeim	フォン、クロートハイム 300	黒上くろかみ郡長	郡長克洛干
Marmont	マールモン 315		
von Kleist	フォン、クライスト将軍 315	栗田くりた大将	柯黎丹提督
Therouanne	テルアヌ河	照名てるな河	台爾那河
Mortier	モルチエール		
Napoleon	ナポレオン 316		
Blücher	ブリユツヘル元帥	元帥	元帥
von Schack	フォン、シヤツク小佐	佐々木ささき中佐	薩土坤遊撃
von Wolzogen	フォン、ヴォルツオーゲン少佐 318		
schlesischen Landwehr	シユレジエン		
Konitz	コーニツツ 322		

Stargard	シュタールガルド		
Wartenstein	ワルデンシュタイン 304,323	待石まついし町 287,409,412	慕義(莪)街
Friedrich Wilhelm	国王 フリードリツヒ、キルヘルム 325	普国王維廉キルヘルム	徳国皇帝王維廉
Virginius	井”ルジニウス 339		
Kain	カイン 354		
Furienheer	フーリエ 382		
Prometheus	プロメトイス 398		
Metternichschen	メテルニツヒ 399		
Quadrille	カドリール		
Liekewoschen	リエケヴオ 405		
Elba	エルバ 411	エルバ島 278,290	愛爾巴島
Nichel Grossjohann	ミヒエール、グロースヨハン 423	大川おおかはにいたる	霍家華
Franz Malky	フランツ、マルキー	丸木まるき倉助くらすけ	馬倫基
Emil Rosner	エミール、ロースネル	茨木いばらぎ美代吉みよきち	伊博拉
Ostern	オーステンの祭		
Born	ボルン 450		
Bichler	ビツヒラ		
Leonore Prohasca	レオノーレ、プロハスカ		
Ligny	リニー508	里具泥リグニー	利古尼

【参考文献】

- 石崎 等「『虞美人草』の周辺——漱石とゾーデルマン」『跡見学園短期大学紀要』第11号 1975.3 電字版
- 徐 從輝「談周作人的一組佚文」『新文学史料』2013年第3期(総第140期) 2013.8.22
- 徐從輝編『周作人研究資料』上下巻 天津人民出版社2014.1 中国現当代作家研究資料叢書
- 吳 曉樵「周作人对晚清德語小説訳作《賣国奴》的評價」『新文学史料』2014年第4期(総第145期) 2014.11.22
- 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.10.15
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

【注】

- 17) 長谷川泉編「年譜・登張竹風」『明治文学全集』40「高山樗牛／齋藤野の人／姉崎嘲風／登張竹風集」筑摩書房1970.7.30/1984.2.20初版第四刷
- 18) 村上浜吉著作兼発行人『明治文学書目』村上文

庫 1937.4.30/飯塚書房1976.7.10影印

- 19) 塩野加織「翻訳からの出発、あるいは翻訳への出発——井伏鱒二訳『父の罪』論」『日本近代文学』第85集 2011.11.15 電字版。30頁の注14
- 20) LINDENBAUM VERLAG GmbH, 2005、電字版 BERLIN, 2016 版を使用。BERLIN: 1889 project gutenberG 所収。また次がある。STUTTGART, 1892 hathi trust 所収。BOSTON: D. C. HEATH & CO. 1899 open library 所収
- 21) 参考にした日本語訳は竹風を除いて次のとおり。  
ズウダアマン著、小宮豊隆『罪』博文館 1914.12.8。背と本文は「罪(カツツエン/シユテーヒ)」197頁も。22、49頁は「カツツエンシユテツヒ」  
ズウデルマン著、井伏鱒二訳『父の罪』聚芳閣 1924.9.10初出未見。『井伏鱒二全集』第28巻 筑摩書房1999.12.25  
BEATRICE MARSHALL 英訳“REGINA OR THE SINS OF THE FATHERS” 1895 / LONDON, NEW YORK: JOHN LANE, 1898 project gutenberG、open library/1904 hathi trust 塩野 John Lane, 1899 (未見) / 塩野 Cotta, 1903 (未見)  
ズウデルマン著、生田春月訳『猫橋』新潮文庫

1939.8.22。底本は1928年二百十版という。

22) 竹風日訳は「吊橋」57頁。豊隆訳は「勿橋」68頁。原文は“Zugbrücke”。マーシャル英訳は“drawbridge” p.52。跳ね橋の意。

23) マーシャル英訳を参考までに示す。

And afterwards when they let her go, and she had made her way home alone, with the wages of her sin in her pocket — how the cracking of bullets, the beating of drums, the clouds of gunpowder, the death-shrieks of the massacred, must have followed her, galloping at her heels like an army of furies ! p.260

24) 砂田城炎上の年次について原作に1807年と1809年の2説がある。竹風もそれを踏襲しており統一はしていない(48頁と319頁)。同じく呉禱は26頁と149頁。

25) いくつかあるうちの2例のみを指摘する。

「阿弥陀に冠つた軍帽」8頁→「頭上戴着亜弥陀軍帽(アマダ軍帽をかぶって)」5頁。「阿弥陀に冠る」とは後ろ下がりにかぶること。それを「アマダ軍帽」という名前の帽子にした。

「一同四方山の物語をしたとき」11頁→「同上塞門山講話の時候(ヨモ山へ行って物語をしたとき)」6頁。「四方山の物語」はさまざまな話をする。それを「ヨモ山」という地名にした。

26) 樽本「魯迅「斯巴達之魂」について」『清末小説』第22号 1999.12.1。のち『清末翻訳小説論集』2007.5.1、『清末翻訳小説論集(増補版)』2017.1.15 電字版所収

樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」物語」『清末小説』第26、27号 2003.12.1、2004.12.1。のち『漢訳アラビアン・ナイト論集』2006.6.1、『漢訳アラビアン・ナイト論集(増補版)』2017.1.15 電字版所収

次号の公開は2023年4月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 呉禱漢訳『侠黒奴』 ——尾崎紅葉訳『侠黒児』

沢本香子

### 1 はじめに

呉禱漢訳『侠黒奴』の底本は尾崎紅葉訳『侠黒児』だ。紅葉日訳の底本はエッジワース作「感謝する黒人」である。英文原作→日訳→漢訳という清朝末期では見慣れた翻訳過程を経ている。呉禱は日本語を理解したから自然な流れだ。

簡単に言えば以上のとおり。しかし、ここにはいくつかの注釈が必要だと思う。

ひとつは呉禱漢訳についての事情だ。清朝末期の翻訳小説を研究する人は現在でも少ない。だからこそ過去において誰がどのように把握したのかを知ることは有益だ。

もうひとつは紅葉日訳がもつた原作発見の経緯である。だいいち紅葉は原作について説明していない。最初から判明していたわけではなかったという。事実を明らかにしようとした人がいた。その努力の結果だ。

過去の研究状況を理解することが今後の発展につながると考える。そこから始める。

### 2 呉禱漢訳『侠黒奴』への言及

紅葉作品の漢訳については中村忠行がはるか以前の1950年に説明している。紅葉日訳『侠黒児』を含めて次のように書いた(割注は開く。

以下同じ)。

光緒卅二年には、その『寒牡丹』(原題同じ)と『美人煙草』(原題未詳)が、又これと前後して『俠黒奴』(原題『俠黒児』)が『説部叢書』の一として、商務印書館から発行せられて居り、殊に『俠黒児』の一篇は、『(改良戯劇)義俠記(一名黒奴報恩)』と題して、天寶宮人により脚色せられ『月月小説』第九号(光緒卅三年九月発行)誌上を飾ってさへある。71頁<sup>\*1</sup>

光緒卅二(1906)年刊行の3作『寒牡丹』『美人煙草』『俠黒奴』はいずれも呉禱が漢訳した。その『俠黒奴』の原作が紅葉日記『俠黒児』であることを指摘しているのに注目すべきだ。1950年という時期からいっても早い(『寒牡丹』『美人煙草』については別稿参照)。

『美人煙草』は尾崎徳太郎(紅葉)著と表記する漢訳単行本が実際にある。ゆえに中村は上に含めた。実は広津柳浪「美人萇」が原作だ。それはさておき『俠黒児』が清末に戯曲化されていることにも言及している。当時としても珍しい。

その後にも中村の説明がある。少年文学、すなわち児童文学に焦点をあてた論文だ。そこの2カ所から引用する。

『俠男児』は、明治廿六年六月、『少年文学』第十九編として、泉鏡花の『金時計』と合綴上梓されたもので、『二人掠助』と共に、紅葉の筆になる少年小説の代表作であるが、華訳者はこれを少年文学として扱ってゐない。といふよりは、むしろ政治小説として、虐げられた民族に対する深い同情の涙を注ぎながら、これを華文に移してゐる趣きが、訳文自体の上からでも窺へる様な翻訳ぶりである。さうした点に於ても、彼此文学観の相違といったものが、見られ

ないこともない。70-71頁<sup>\*2</sup>

『月月小説』の九号には、天寶宮人補申の「(改良戯劇)義俠記 一名黒奴報恩」が、掲げられてゐる。既述した尾崎紅葉の「俠男児」を、芝居の台本に脚色したものであるが、脚色者の直接據つたものは、呉禱訳であらう。76頁

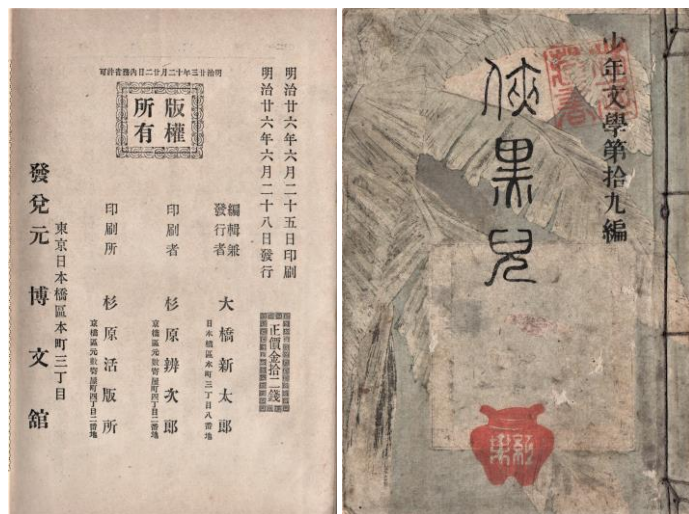
誤植はあるにせよ紅葉『俠黒児』が呉禱漢訳『俠黒奴』になったことを重ねて指摘した。

以上を根拠にして樽目錄初版(1988)より呉禱『俠黒奴』(1906)の底本は尾崎紅葉『俠黒児』(1893)だと注記している。ただし当時はその原作がエッジワース著だとは知らなかった。

その後、渡辺浩司より英文原作が MARIA EDGEWORTH “THE GRATEFUL NEGRO” (“POPULAR TALES” 1804) だという指摘ももらった。樽目錄第4版(2011)に追加記入して現在(第14版2022)にいたる。

### 3 紅葉日記『俠黒児』の原作

紅葉山人(尾崎紅葉)『少年文学第19編 俠黒児』(博文館1893.6.28。泉鏡花「金時計」と合冊。挿絵は武内桂舟)である。「少年文学」叢書の1冊に収録された。



原作はエッジワース著「THE GRATEFUL NEGRO」だ。

知ってからそう書くのは簡単きわまりない。しかし、エッジワースの名前まではわかっていたとしても作品名が明らかにされるまでにはかなりの時間が必要だった。『俠黒児』の原作について説明している文章を『尾崎紅葉事典』(2020)<sup>\*3</sup>より引く。簡潔に述べられている。

この作品は、発表当時から「紅葉がものせしエツジナルスの『俠黒児』あり」(『早稲田文学』明治二六年八月)として知られていた。しかし、具体的にアイルランドの女性作家で、一九世紀のイギリスで広く読まれた児童文学作家の一人である Maria Edgeworth (マライア・エッジワース、一七六七～一八四九年)の“The Grateful Negro”(一八〇二年執筆、一八〇四年刊行)が原作であることを明らかにしたのは、土佐亨「尾崎紅葉「俠黒児」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」(『解釈』昭和四六年(一九七一)年三月)であった。41頁。宗像和重執筆

上に出てくる土佐亨の同題論文には修正稿がある。「紅葉がものせしエツジナルスの『俠黒児』あり」については次のように追加記述した。

さかのぼって調査すると、「早稲田文学」(45号、明治26・8)の「文界現象」欄の記事「翻訳流行」に「紅葉がものせしエツジナルスの『俠黒児』あり」(鄭漢生)という記述がある<sup>\*4</sup>。

その後大嶋浩もその個所を示した。「鄭漢生「翻訳流行」、『早稲田文学』第45号(明治26年8月10日):302-03。(中略)「紅葉がものせしエツジナルスの『俠黒児』あり」と一致する<sup>\*5</sup>。

紅葉『俠黒児』の明治26(1893)年発表から土佐による原作発見は1971年だ。単純に計算して78年もの時間が経過している。作品によっては原作探索に手間ヒマがかかるのは普通のことだ。たとえば菊池幽芳日訳『乳姉妹』(1904)がある。その底本がシャーロット・M・ブレイム『ライル卿の娘 LORD LISLE'S DAUGHTER』(1880)だと指摘されたのは2020年だった。116年間も『ドラ・ソーン』だと勘違いされていた。

土佐は原作品名(THE GRATEFUL NEGRO)を「恩がえしをした黒人」と翻訳した。紅葉訳文にある「旦那様、これが御恩返し」(92頁)がもとになっていると推測できる。紅葉は原作を改変して主人公の黒人を死なせた。土佐はそれを優先して「した」と過去形を使用したようだ。原作では死んでいない。ゆえに本稿では冒頭に示したとおりの原文にもとづいて拙訳「感謝する黒人」と称する。

#### 4 エッジワース「感謝する黒人」の背景

マライア(マリア)・エッジワース(MARIA EDGEWORTH、1767又1768-1849)である。

細かいことだが名前の読みがマライアとマリア、また生年が1767年と1768年の2説がある。明治、大正時代頃にはマリアと表記していたようだ(大嶋2020による)。

説明のひとつは次のとおり。関連部分のみを示す。

エッジワース、マライア(Maria Edgeworth 1768.1.1-1849.5.22)はイギリスの女性小説家。アングロ=アイリッシュ。476頁。出淵敬子執筆<sup>\*6</sup>

上はマライアで1768年1月1日の生誕とする。一説は1767年1月1日生まれとあって生年が異なる<sup>\*7</sup>。

前出の大嶋浩は彼女の生年を1768年に訂正

した。根拠は Marilyn Butler and Christina Colvin “A Revised Date of Birth for Maria Edgeworth” *Notes and Queries* (Sept. 1971: 339-40) という (49頁。単行本133頁)。筆者未見だがそうなのだろう。

エッジワース作「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」(1804)は『大衆物語集 POPULAR TALES』第3巻(1804)に収録された。以後、多くの版本がある。現在ではネットで読むことができる\*8。

作品は西インド諸島ジャマイカを舞台にする。黒人奴隷と白人農園主の対立が基本に設定されている。それを見ればすぐさま奴隷制という単語が頭に浮かぶだろう。現代の視点をもってエッジワースが奴隷制反対の見解を持っていたのではないかと予測すれば外れる。事情は簡単ではない。彼女が生きた時代の事情があるからだ。

エッジワース原作が刊行された当時の歴史的背景をごく手短かに述べる\*9。

作品の舞台となっているジャマイカはカリブ海にある島国だ。16世紀にスペイン人が征服すると砂糖キビ農園の労働力として西アフリカから多くの黒人が送られた。17世紀には支配者がイギリス人に替わる。一方で逃亡奴隷たちがイギリス植民地政府に対する反乱をくりかえした。1807年、イギリス議会はアフリカ、ジャマイカ間の奴隷貿易を廃止する。奴隷制が廃止されたのはさらに遅れて1833年のことだ。

その基本になった経済的構造は次のとおり。

イギリスの工業製品がアフリカにおいて黒人と交換される。黒人はカリブ海の農園に送られ砂糖、綿花、インディゴなどの生産に従事させられる。紅茶の嗜好流行拡大により砂糖の需要が増大する。それで獲得された富がイギリスに流入して工業がさらに発展する。これが三角奴隷貿易である。

砂糖などの輸入販売を行なう商人、輸送に必要とされる船舶、その海上保険、農園で必要とする肥料、農具、食料、衣類の買い付け業務な

どイギリスの利害関係者は多数にのぼった。

ここで重要なのはエッジワースの作品(1802年執筆)が発表された1804年という時期だ。それは奴隷貿易が廃止(1807)される以前だった。当時、ジャマイカでは奴隷制度が生きていたことを無視できない。それに対するイギリス人の立場には3種類がある。賛成派と反対派はいうまでもない。その中間に奴隷制度を黙認してそこで労働する奴隷の負担を軽くしようとする穏健派もいた。

該作品の内容から見るとエッジワースはその穏健派に属していることがわかる。

## 5 エッジワースの奴隷制度に対する考え

原作から該当する部分を引用して説明する。

小説「感謝する黒人」にはふたりの白人農園主がいる。ひとりとは穏健派エドワーズだ。

【原作】 This gentleman treated his slaves with all possible humanity and kindness. He wished that there was no such thing as slavery in the world, but he was convinced, by the arguments of those who have the best means of obtaining information, that the sudden emancipation of the negroes would rather increase than diminish their miseries. p.400

この紳士(エドワーズ氏)は、可能な限りの人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた。彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていたが、情報を入手するのに最適な手段を持つ人々の議論によって、黒人の突然の解放は彼らの不幸を減らすどころかむしろ増加させることになるかと確信していた。

上には「彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていた He wished that there was no such thing as slavery in the

world」という表現が見える(紅葉はここを省略した)。これはあくまでもエドワーズの気持ちであって制度そのものに反対しているわけではない。

あるいはエドワーズは奴隷貿易について法律で禁止することにも言及している(紅葉はここも省略した)。

【原作】 If the future importation of slaves into these islands were forbidden by law, the trade must cease. p.403

今後、これらの島々に奴隷を輸入することが法律で禁止されれば、貿易は中止しなければならなくなる。

こちらも仮定の話だ。エッジワースの作品が公表された時にはそれは実現されていない。

小説の中のエドワーズは農園主だ。自分の生活を維持するためには奴隷制度が必要だと認識している。ただ「人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた」。

農園主エドワーズについての説明はそのまま著者エッジワースの思考だと考えていい。そうでなければ重要な登場人物のひとりに設定はしないだろう。

黒人を奴隷制度から突然解放することはかえって彼らのためにはならない。待遇改善をはかる。具体的には、決まった仕事以外に働けば報酬を支払う、あるいは黒人奴隷の小屋の近くに土地を与え1週間に1日その耕作に使用してもよいと許可したことなどだ。小説の中でそう説明している。それらを見れば穏健派に属することが明らかだ。

筆者が目目するのはエッジワースが作品中にほどこした脚注だ。紅葉はここも省略した。児童向けには不必要だと考えたのだろう。エッジワースは当時のジャマイカ状況を理解するために文献を収集した。関連文献を注に紹介して小説の内容が事実にもとづいたことを示している。

一部は次のとおり。

【原作】 Footnote: THE NEGRO SLAVES —a fine drama, by Kotzebue. It is to be hoped that such horrible instances of cruelty are not now to be found in nature. Bryan Edwards, in his History of Jamaica, says that most of the planters are humane; but he allows that some facts can be cited in contradiction of this assertion.

脚注:「黒人奴隷」はコツェブエによる素晴らしいドラマだ。このような残酷な恐ろしい例が今では自然界に見られないことを願うばかりである。ブライアン・エドワーズは『ジャマイカの歴史』の中でほとんどの農園主は人道的であると述べているが、この主張に反する事実がいくつか挙げられることを認めている。

アウグスト・フォン・コツェブエ (AUGUST VON KOTZEBUE、1761-1819) は奴隷制廃止論者。原作はドイツ語戯曲 (1796)。英訳「黒人奴隷 THE NEGRO SLAVES」(1800。未見)。エッジワース自身が「残酷な恐ろしい例」と書いている。彼女が作品で奴隷を鞭打つ描写などに該戯曲を利用したかどうか、未見だからわからない。

もうひとりのブライアン・エドワーズ (BRYAN EDWARDS、1743-1800) は政治家、歴史家。そこでいう『ジャマイカの歴史』とは『イギリス植民地西インド諸島の内政と貿易の歴史 HISTORY, CIVIL AND COMMERCIAL, OR THE BRITISH COLONIES IN THE WEST INDIES』(1793初版)を指す。

研究書からエドワーズについて言及した一部分を紹介する。その訳者中山毅は名前を「ブリヤン」と訳している。

一八世紀末の英領西インド諸島の歴史家であったブリヤン・エドワーズは、二人の富裕な叔父が西インド諸島で砂糖キビ栽培に従事していなかったならば、ウィルトシャーのうらさびれた町ウェストバリで僅かな父親の遺産を頼りに生き、死に、そして忘れられたことであろう、と告白した。(中山訳153頁)

ブリヤン・エドワーズは、おのれの属するプランター層が途方もない贅沢三昧にふけり、あるいはそれをことさらにひけらかして世人の矚意をかっていう非難を、むきになって否定した。が、その非難の正しいことについては、確かな証拠がある。西インド諸島人の金力については、誰一人知らぬものはなかった。ロンドンとブリストルには富裕な西インド諸島人の社会が見られた。(中山訳154頁)

以上はエッジワースの脚注に見える記述に関連する説明になっている。

エドワーズはジャマイカで農園を経営したことがあった。ジャマイカが砂糖栽培の植民地として存続するには奴隷貿易を守らなければならないと主張したという。そうすることが経営を維持するためには必要だった。奴隷制度に虐待があることを認めながら改革しつつ存続させるべきだという立場をとる。

なるほど西インド諸島の農園で得た富にエドワーズもどっぷりつかっていた。それでは奴隷制度反対派にはなりようがない。

エッジワースは自分の作品にほかならぬ同姓の「エドワーズ」を登場させている。ここは重要だ。彼女が実在する穏健派のエドワーズの考えを支持した結果であるとわかる。

前述のとおりエッジワースは作品を書くにあたって関係文献を参照した。だから当時ジャマイカにおいて実際に影響力を発揮していた魔術師(呪術師)が小説に出てくるのも不思議では

ない。現実にもとづいた小説だから具体的な描写ができた。

しかしジャマイカの奴隷制はあくまでも小説の背景であるにすぎない。作品の主題は別のところある。

## 6 エッジワース作品の意図

エッジワースにとって作品に重要なのはジャマイカで生活する人々の行動と思考そのものだ。奴隷制を超えた主題がある。すなわち恩義と(恩人)と友情(友人)をめぐる葛藤だ。黒人、黄人、白人などの人種の垣根を突き抜けて存在する。人間にとっての普遍的問題だといっている。ただし友情と恩義が信じられていた時代において、と条件をつける。エッジワースはこの主題がより鮮明になるように奴隷制下にある白人と黒人の対立を持ち出した。

作品にでてくる鍵語のひとつは恩義、報恩、感謝の気持ちを意味する *gratitude* だ。その形容詞(感謝している)が *grateful* である。作品題名の「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」で使用される。

エッジワース原作の冒頭にこの *gratitude* が出てくる。

【原作】 In the island of Jamaica there lived two planters, whose methods of managing their slaves were as different as possible. Mr. Jefferies considered the negroes as an inferior species, incapable of gratitude, disposed to treachery, and to be roused from their natural indolence only by force; (後略) p.399

ジャマイカ島にはふたりの農園主が住んでいたが、彼らの奴隷の管理方法はまるで違っていた。ジェフリーズ氏の考えでは、黒人は劣等種であり、感謝の気持ちを持つことができず、背信行為をしやすく、生まれつきの怠惰から目覚めさせるには力によ



つてのみというものだ。(後略)

残忍な農園主ジェフリーズの考えによれば黒人は「感謝の気持ちを持つことができない incapable of gratitude」。しかし主人公の奴隷シーザーに限ってはそうではない。例外だから題名の「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」である。

作品冒頭から鍵語の「恩義、報恩、感謝の気持ち」が明示される。題名と合わせて考えればこれが主題だと念を押すまでもない。否定語の忘恩 ingratitude も使われていることもしておく。

恩義の向かう方向は恩人 benefactor だ。それと関連してもうひとつの鍵語が友情 friendship (友人 friend) である。

作品の主要登場人物を簡単に紹介する。

奴隷のシーザーとその恋人クララがいる。友人のヘクターは白人からの虐待に堪え切れない。背後にいる魔術師に操られながら彼は白人皆殺しを主張し同胞と反乱を計画する。その対象にはシーザーとクララのふたりを救済した農園主の穏健派エドワーズが含まれる。

奴隷シーザーは恩義(恩人)と友情(友人)の感情に板挟みになった。彼はどうするのか。焦点はそこに絞られる。

シーザーは結局のところ恩人エドワーズのために命を投げ出す決心をした。その恩義の感情はヘクターへの友情、恋人クララの愛よりも強い。原作から引用する。

【原作】 Cæsar's mind was divided between love for his friend and gratitude to his master: the conflict was violent and painful. Gratitude at last prevailed: he repeated his declaration, that he would rather die than continue in a conspiracy against his benefactor! p.407

シーザーの心は友人への愛と主人への感

謝との間で揺れ動き、その対立は激しく苦しいものであった。しかし最終的には感謝の気持ちが勝って、恩人に対する陰謀を続けるくらいなら死んだほうがまだ、という告白を繰り返したのだった。

【原作】 The conflict in his mind was violent: but his sense of gratitude and duty could not be shaken by hope, fear, or ambition; nor could it be vanquished by love. p.417

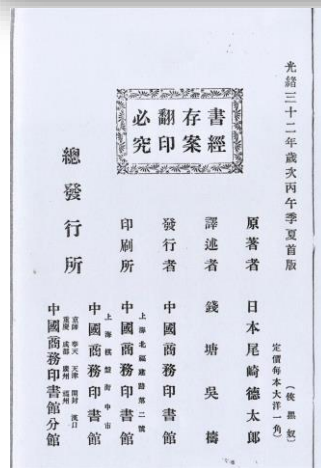
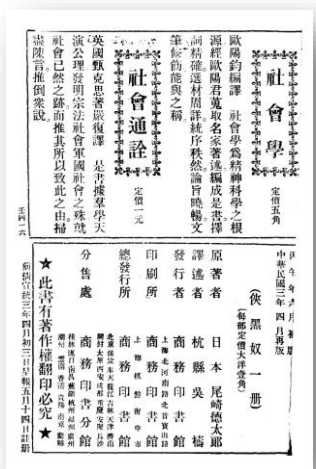
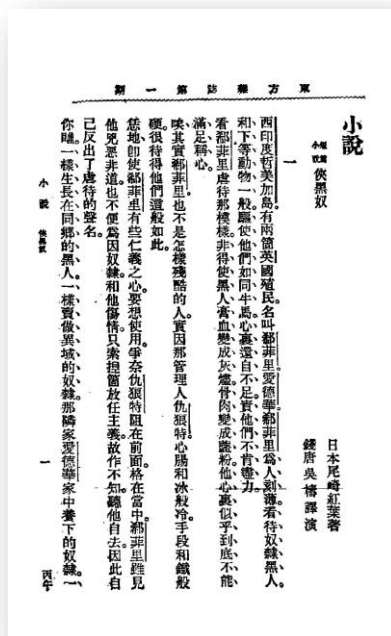
彼(シーザー)の心の中の葛藤は激しかったが、彼の感謝と義務の気持ちは、希望や恐怖、野心によって揺らぐことはなく、愛によって打ち負かされることもなかった。

エッジワースは友情と恩義のはざままで苦悩する主人公を作品の中心に設定している。普遍的な問題だ。しかも恩義が友情を凌駕するという方向に定めた。奴隷制度はあくまでも背景にあるにすぎない。紅葉はそれをしっかりと把握して継承した。いくつかの省略、加筆と最後部分の変更はあるにしてもエッジワース小説の基本に沿って翻訳している。

## 7 エッジワース原作から紅葉日記を経て呉構漢訳へ

これより原作と紅葉日記および呉構漢訳を比較対照する。

呉構漢訳は最初『東方雑誌』第3年第1-3期(光緒三十二年正月二十五日・三月二十五日(1906.2.18-4.18))に掲載された。尾崎紅葉著と記述する。のちに「説部叢書」元版系第六集第二編(上海・中国商務印書館 光緒三十二年(1906)年歳次丙午季夏(六月)首版)(上海図書館所蔵。本稿で使用する)では原著者を尾崎徳太郎と表記した。さらに後刷りの「説部叢書」初集第52編(上海・商務印書館 丙午(1906)六月初版/中華民国二(1913)年十二月三版。また丙午年六月初版/中華民国三



(1914)年四月再版)などがある。  
 エッジワース原作は章分けをしない。本稿で使用する1856年版はわずか20頁だ。1804年初版は47頁。版本によって組版が異なるから数字は動く。短篇小説の部類に属する。  
 紅葉日訳は6(章)に分ける。こちらは挿絵を含み大活字を使用するから94頁になる。紅葉全集第3巻(博文館1904。国立国会図書館デジタルコレクション)では55頁。原作について省略、加筆、改変をしているがその規模は小さい。紅葉日訳は分量的に言えば原作とほぼ同等だ。日本人研究者が紅葉日訳について原作の半

分から3分の1に縮約しているという。根拠が不明。呉禱漢訳も6章を守って54頁である。  
 上に引用した原文の冒頭を紅葉と呉禱はどのように翻訳したかを見る(ルビ省略。くり返し記号は文字に置き換える。以下同じ)。  
**【紅葉】**西印度じやめいか島に殖民せる、じふえりい、えどうあゝどなる二名の英人ありけり。じふえりいは奴隷の黒人を見ること劣等動物の如く、牛馬に等しく駆役しつ、尚未だ彼等の全力を盡さざるを責めぬ。  
 1頁

上の紅葉日訳を見れば原文を直訳したものではない。あとから登場するエドワーズを前に持ち出している。また「(黒人は)感謝の気持ちを持つことができず」などを省略した。かといって原作から離れたまったくの別物でもない。簡約して翻訳した。

紅葉日訳『侠黒児』という題名が重要だ。「侠」とは信義に厚い、義理堅い、恩を忘れないこと。「黒児」は黒人の若者、男子だ。

「侠」という字をつかっているところから紅葉がエッジワースの主題「感謝する」すなわち「恩を忘れない」を確実に把握したことがわかる。

英文原作は紅葉の時代からほぼ90年昔の物語だ。そこに言及される奴隷制度についての説明は日本の児童には不必要だ、と紅葉が判定したのは納得できる。もっと重要な問題がある。恩義と友情、それに報恩だ。それを児童に理解させるには最適な作品であると考えた。だからこそ児童文学の翻訳として「少年文学」叢書に抵抗なく収録された。

紅葉は「侠黒児」という作品において奴隷制に反対していたか。そうであってほしいと期待すれば裏切られる。エッジワース原作そのものが擁護派の立場で書かれている。紅葉日訳もそれを忠実に引き写しているからだ。

呉禱漢訳『侠黒奴』は紅葉の作品名を踏まえる。恩を忘れず感謝する「黒人少年」を「黒人奴隷」に書き換えただけ。

次に呉禱漢訳を示す(漢訳を翻訳するばあい固有名詞は紅葉の用語をカタカナに変更して使用する)。

【呉禱】西印度 哲美加島。有兩個英国殖民。名叫邨菲里。愛德華。邨菲里為人刻薄。看待奴隸黑人。和下等動物一般。驅使他們如同牛馬。心裏還自不足。責他們不肯盡力。1頁

西印度ジャマイカ島にふたりの英国植民がいた。名前をジフエリイ、エドウア、ドという。ジフエリイは性格が酷薄で奴隷の黒人を下等動物のように待遇し、彼らを牛馬に等しく駆り立て、それでもまだ満足せず、彼らが力をつくす気がないと責めるのだった。

呉禱漢訳は紅葉日訳を直訳していると言っていい。省略もせず加筆もしていない。

エッジワースの奴隷制度に対する態度をエドワーズの描写に見た。そこを紅葉はどう翻訳したか。日本語訳を再度示して対照する。

【原作訳文】この紳士(エドワーズ氏)は、可能な限りの人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた。彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていたが、情報を入手するのに最適な手段を持つ人々の議論によって、黒人の突然の解放は彼らの不幸を減らすどころかむしろ増加させることになると確信していた。

【紅葉】えどうあ、どは天性至仁にして、不具なる子に親の慈愛の深きごとく、天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる、箇(この)蒙昧暗愚の民を憐む志衆に超えたり。3頁

【呉禱】愛德華那人。生来天性至仁。平日見了盲啞聾跛。身上稍有不全之人。已和爺娘愛惜兒女一樣。道他也是一般人類。却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉。這等殘疾之人民。不可憐却可憐什麼。2頁

エドウア、ドという人は生まれつき天性至仁にして、盲啞聾跛など身体に不具合がある人を見ればまるで親が息子娘を大事にするのと同じようにした。同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人權を伸ばすことができずに強盗の餌食(釜の

中の魚、まな板の上の肉) になっている、  
 と言うのだった。これら身体障碍の人を憐れまなければ何を憐れむというのか。

紅葉は「奴隷制度」について翻訳しなかった。ジャマイカの農園が奴隷によって成り立っていることを理解しているからだ。その制度そのものについては取り上げる意志は持たないとわかる。日本の児童にとってはより重要なことが別にあると判断しているにほかならない。

紅葉が強調したのはその前半部分にあるエドワーズの性格が慈愛に満ちてこの上なく恵み深いことだ。エッジワースが奴隷制度を小説の背景にしているだけだと見抜いている。呉禱も同じ。ただ紅葉の「蒙昧暗愚の民」という精神面についての表現を呉禱が「残疾之人民」と身体面に漢訳したのは方向がズレている。

それでも上の部分にほどこした加筆から紅葉の黒人についての認識がにじみ出る。

残忍なジェフリーズは黒人を劣等種 (an inferior species) であると考えていた。作品冒頭にそう述べられている。紅葉は原作どおりに「劣等動物」を当てた。呉禱も「下等動物」と訳して同じだ。

上は穏健派エドワーズの考え方についての説明である。慈愛の感情を強調したのはエッジワースのままで問題はない。しかし紅葉は原文にはない「蒙昧暗愚の民」を加筆した。黒人を愚かであると説明したのだ。別の個所でも「人間が愚鈍だけに、一入(ひとしほ)可哀さうでなりません」(13頁)と紅葉は語句を付け加えている(呉禱漢訳「要知世上愚鈍癡癡的人。終是可哀可憐的」8頁)。紅葉の追加記述によって残忍なジェフリーズと穏健派エドワーズの黒人に対する認識は一致してしまう。

紅葉によるこの描写には根拠がある。エッジワース原作のうしろ部分から持ち出してきた(その後ろの部分は紅葉は省略して翻訳していない)。すなわち残忍なジェフリーズが穏健派

エドワーズに向かって次のように言い放った。

【原文】 You are partial to negroes; but even you must allow they are a race of beings naturally inferior to us. You may in vain think of managing a black as you would a white. Do what you please for a negro, he will cheat you the first opportunity he finds. You know what their maxim is: 'God gives black men what white men forget.' p.404

あなたは黒人が大好きですが、あなたでさえ黒人は生まれつき我々よりも劣った人種であることを認めざるを得ません。白人と同じように黒人を管理しようと思っても無駄だ。あなたが黒人のために好きなようにやっても、黒人は機会を見つけてはあなたを騙しますぞ。彼らの格言を知っているでしょう。「神は白人が忘れたものを黒人に与える」

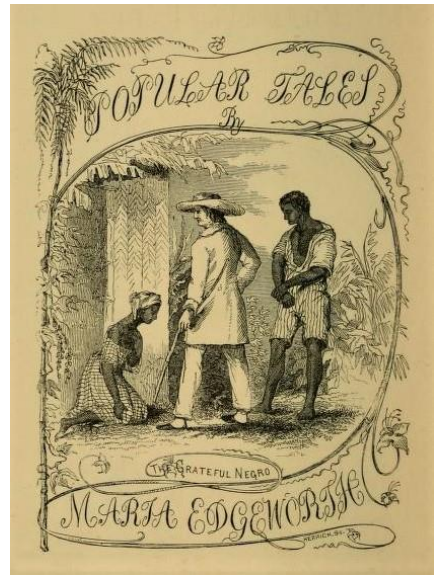
穏健派エドワーズはこの発言に対して反論しなかった。「エドワーズ氏はこれらのありふれた意見には何も答えず To these common-place desultory observations Mr. Edwards made no reply;」とある。敢えて無視したとも読める。しかし結果として作者エッジワース自身が見方を黙認したからだといわれてもしかたがないだろう。彼女は黒人を白人よりも「劣った人種」だと考えているのだ。

というように紅葉のこの「蒙昧暗愚の民(愚かな黒人)」という認識はエッジワースをそのまま受け入れて出てきている。紅葉を責めても意味がない。

もうひとつの加筆は「天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる」だ。ほぼ直訳した呉禱漢訳をくり返せば「却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉」である。生まれながら人間として持っている権利が理由



a1865



b1867



c1893



d1895

もなく妨げられて強盗のくい物にされていると述べる。

ここはエッジワースを超える紅葉の認識の高さを示している。紅葉は白人も黒人も区別しない基本的な人権があることを主張する。たしかにエッジワースの思考を引きついだ黒人に対する偏見がある。それと同時に紅葉が持つ天賦人権観が混在している箇所だ。

奴隷シーザーは命を懸ける

シーザーが穏健派エドワーズに恩義(感謝の気持ち)を抱くことになった経緯を説明する。

残忍なジェフリーズの農園で働いていたシーザーは他所へ売られるところだった。シーザーの恋人(紅葉日訳では妻)が大泣きしている。

参考として挿絵を4葉掲げる。2葉は残忍な監督デュラントがシーザーを売るとクララに告げている(a1865、b1867。数字は刊年)。同じ構図の1葉は紅葉訳本掲載(c1893)。残る1葉(d1895)はシーザーが穏健派エドワーズに自

分たちを買ってほしいと訴える場面だ。

黒人の服装が異なっていることがわかる。初期刊本は半裸だ (a1865)。後に簡単な服装 (b1867) から1895年版では裸足であることを除いて白人とほぼ変わらない。出版社と刊行時期によって編集方針が違ったからだろう。紅葉訳の挿絵 (c1893。桂舟画) ではシーザーとクララは半裸だ。それを根拠に紅葉の使用した底本がかなり以前のものだと考える人もいるだろう。しかし確定はできない。偶然に一致した可能性もある。原作にはもともと挿絵はないのだ。通りかかった穩健派エドワーズが事情を尋ねる。その時シーザーから強い申し入れが発せられた (青色は筆者)。

【原作】 Caesar now for the first time looked up, and fixing his eyes upon Mr. Edwards for a moment, advanced with an intrepid rather than an imploring countenance, and said, "Will you be my master? Will you be her master? Buy both of us. You shall not repent of it. Caesar will serve you faithfully." p.402

シーザーは初めて顔を上げ、しばらくエドワーズ氏と目を合わせた後、懇願するというよりはむしろ勇敢な表情で進み出て言った。「私の主人になってくれませんか？彼女の主人になってくれませんか？私たち両方を買いなさい。後悔はしないでしょ。シーザーはあなたに忠実に仕えます」

【紅葉】今までは声も出さず、身動きもせざりし志いざあは、此時纔 (わずか) に面を挙げ、偷むが如くえどうあゝどの顔を眺めて、其心を読まむとするに似たり。読み得たるか、つかつかと進寄りて、

「旦那様、願ひでございます。どうぞ私をお買ひなすつて下さいまし。彼女 (あいつ) めも一所にお買ひなすつてやつて下さいまし。其代りには、二人の命は旦那様

に差上げました了簡で、どんなにも御奉公いたします。9、11頁

【呉構】 先前直到此刻。身子不動口舌不言的西查。這時纔擡頭仰面。偷著看望愛德華面顔。不知想些什麼心事。忽地拔身向愛德華那邊走了過去。開口告求。

「老爺。求你老的大恩。總得想箇方法。將我買下。那女子。也求買在一起。俺兩人的性命。一夥兒交給老爺。願生生世世伺候老爺再不改變」 5-6頁

今までは身動きせず声も出さなかった志イザアは、この時ようやく頭をあげ仰向くと何を考えているのかわからないが、つとエドワアゝドに近寄ると訴えた。

「旦那様、あなた様の恩情をおかけください。なんとかして私をお買いください。あの女子も一緒にお買いくださいますようお願い。ふたりの命はともに旦那様に差上げます。世世代代にわたって旦那様にお仕え申しあげ変わることはございません」

呉構漢訳は紅葉日訳をほぼ直訳しているから触れない。

原文は「Caesar will serve you faithfully シーザーはあなたに忠実に仕えます」だ。青色部分の「忠実に、誠実に仕えます」は「命を懸ける」わけではない。エッジワースは「命を捨てる覚悟」までは書いていない。それを紅葉は「二人の命は旦那様に差上げました了簡で」と「命」を強調して翻訳した。両者は違うようできてそうではない。「恩義 (感謝の気持ち)」に「命」を直結させたのは紅葉の工夫でもなければ変更でもないからだ。

エッジワース原作には「命を懸ける」男性として最初からこのシーザーと親友ヘクターがいるのだった。ふたりはコロマンティン族だ。同じ船でジャマイカに連れてこられた。苦勞を共にし互いに尊敬しい硬い友情で結ばれている。彼らの性格をエッジワースは次のように説明す

る。

【原作】Hector would sacrifice his life to extirpate an enemy. Cæsar would devote himself for the defence of a friend; p.406

ヘクターは敵を滅ぼすために自分の命を犠牲にする。シーザーは友人を守るために身を捧げる。

シーザーが友人のためには命を懸けるという性格であることを言う。

紅葉はこの個所を少し改変して翻訳した。

【紅葉】へくとるは慄悍にして乱を好み、志いざあは深沈にして壮武なり。18頁

【呉禱】海克道為人。猛鷲慄悍。喜動好乱。西查呢。秉性深沈。気概強壯。11頁(直訳だ)

エッジワース原作にあって紅葉が変更したもうひとつの箇所がある。穩健派エドワーズがシーザーを信頼してナイフを与えた。それに対するシーザーの思いが書かれている。

【原作】but no sooner was Mr. Edwards out of sight than he knelt down, and, in a transport of gratitude, swore that, with this knife, he would stab himself to the heart sooner than betray his master! p.412

しかし、エドワーズ氏が見えなくなるやいなや、シーザーはひざまずき、感謝の気持ちを含めて、主人を裏切るくらいなら、このナイフで自分の心臓を突き刺す、と誓ったのである。

【紅葉】万が一どんなか事でもあつた時には、一同命を捨てまして、日頃の御恩返しをいたさうと、へい、そんな事を楽しみにしてをります。56頁

【呉禱】万一有什麼事情時候。情願一齊抛

擲性命。報答你老一生的大恩。哈嘍。那纔是小人們的快樂咧。33-34頁(「へい」を「哈嘍(ハイ)」とそのまま写して直訳。ゆえにここでは訳さない)

紅葉はナイフ部分を省略した。だが「恩返し＝命を捨てる」はエッジワース原作を引き写している。

ここにはもうひとつ紅葉による加筆がある。ジェフリーズはクララが病気であることを知っており仕事を休ませるよう、また医者を送るから薬を飲ませろと言いつけた(57-58頁)。シーザーはその暖かい言葉に感激してひとり決意を固める。

【紅葉】「いよいよ生きてはみられぬ。58頁

【呉禱】「好好。越發不要活了」35頁

ああ、いよいよ生きてはいられない。

これら決死を意味する表現を紅葉はシーザーとエドワーズの出会い部分に凝縮して挿入したといえる。

紅葉による独自の加筆があることをさらに指摘する。

親友ヘクターらの反乱計画を知ったシーザーは苦悩する。秘密を主人に告げれば白人は警戒して同胞の計画は失敗する。そうして親友と友情は失われる。そればかりかシーザーが予想することはもっと恐ろしい。

【紅葉】さては全島の黒人計を破られて、再び白人の囚虜とならむには、我同胞は如何ならむ、其苦艱は死にもなかなか優るべし。59頁

【呉禱】黒人的密計。全然敗露。從此以後。全島の黒人。更做了白人囚虜。比前虐待得更加利害。白人的同胞。果然得計。俺の同胞。這便如何。這等苦楚。真個還是死了強得多。35頁

黒人の秘密計画がすべて露見すれば、それから以後は全島の黒人はふたたび白人の虜囚となり、以前よりも虐待はもっと厳しくなる。白人の同胞が秘密を知れば、俺の同胞はどうなるのか。この苦悩はまことに死に勝るものであった。

紅葉は反乱の露見、失敗後の様子までも書き込んでいる。恩を受ければ自分の命をも差し出す(報恩)。叛逆に失敗すれば復讐される(報復)。報恩と復讐は表裏一体のものだ。紅葉のこの文章はエッジワース原作には見られない(呉禱は紅葉の文章をよく漢訳している)。

紅葉はジャマイカにおける白人と黒人の対立状況、奴隷制の厳しさを的確に認識していたといえる。一方の原作者エッジワースはその現実を目を背けていた。何も記述していないからそう考える。

シーザーは恩義を受けたらそれに報いるためには自分の身を犠牲にすることを躊躇しない。友人ヘクターとはもともとそういう関係だ。恩人に対しても同じ思いになる。ゆえに友人と恩人が対立すれば両者の板挟みにならざるをえない。

同様の表現はいくつか見られる。シーザーがヘクターに告白する。

【原作】 He that is now my benefactor—my friend! p.407

あの人は今や私の恩人だ——友人なんだ!

【紅葉】それは、真箇に慈悲深え、善人だつちやねえ。我の大恩人だ。人ぢやねえ、神様だな。25頁

【呉禱】啊。真箇是我仁慈哩。真箇是善人哩。我的大恩人。你道他人啊。他見直是天神。16頁(直訳だから訳さない)

紅葉は「人ぢやねえ、神様だな」と強調した。

シーザーのエドワーズに対する称賛が止まらない。ヘクターにはそれが理解できないし我慢がならない。それでもシーザーは言いつつた(下線は筆者)。

【原作】 Caesar, unmoved by Hector's anger, continued to speak of Mr. Edwards with the warmest expressions of gratitude; and finished by declaring he would sooner forfeit his life than rebel against such a master. p.407

シーザーはヘクターの怒りに動じることなくエドワーズ氏への感謝の言葉を述べ続けた。最後に、このような主人に反抗するならば、自分の命を失うこともやむを得ない、と言いつつ切った。

【紅葉】一杯の水を乞(もら)つたつて恩はやつぱり恩ぢやねえか。こんな事をいつたら、又お前に怒られるか知らねえが、我は真箇に旦那の為には命を捨てる気だから、事が起れば、今までは兄弟分でも敵同士。品に依つちや命の与奪をしめえとも限らねえ。30頁

【呉禱】你不知受人一碗飯。求人一盃水。也是人的恩麼。這些話和你講。或是又触犯你的怒。也是難說。但我真箇為了我主人。拋捨性命。也是情願。俺們這多時的弟兄价。須要變為仇敵。道不得箇同室操戈。18-19頁

一碗の飯をもらう、一杯の水を求めても人の恩だとお前は知らないか。こういう事をいえばまたお前に怒られるだろうから言いにくい、しかし本当に俺の主人のために命を捨てることになっても本望だ。俺たちは長らく兄弟分だったが敵同士にならなくちゃならない。内輪もめというやつではないか。

「一杯の水」に恩義を感じる。紅葉の説明に呉禱は「一碗飯」を加えて対句風に飾った。ま



た紅葉の漢字「乞」に引かれて「求」と漢訳した。呉構漢訳にはそういう傾向がある。

シーザーは友情と恩義の板挟み状態だったが、ヘクターを説得する過程で恩義のために死んでもしかたがないと覚悟した。ここが重要だ。紅葉はこのエッジワースが示した筋道を守ってさらに強調することにした。

### 恩義に報いる——その具体的方法を紅葉が提出する

紅葉は原作にはない狼の報恩物語を独自に加筆した。

昔、ある医師が山道で狼に遭遇した。襲ってこないのを見れば口を開けて苦しんでいる。医師は狼の喉に刺さった骨を抜き取ってやった。後日、狼が一振りの剣を加えて「報酬(むくい)」とした(呉構漢訳は「報恩」10頁)。次も紅葉の加筆だ。

【紅葉】情を知らざる人の性を、虎狼ともいふなる悪獣さへ、恩を懐ふことの浅からざる如斯(かくのごとし)。彼等野蛮なりといへとも、非情の木石に同じからざれば、憂きにも、愁(つら)きにも、泣くことゝてはあざりし、剛勇不敵の志いざあも、此事を語り出で、は、常に涙を流しけり。16頁

【呉構】不通靈性似虎狼等悪獣。尚且懂得報答深恩。黒人雖道野蛮。倒底還是人類。不是無情木石。那有不識憂。不識愁。不知恩怨之理。瞧啊。剛勇不敵的西查。提起狼劍那件事。暗地裏常自流淚。10頁(直訳しているから訳さない)

紅葉の加筆であるがその思考法(恩義に報いる)はエッジワース原作にもとから存在している。紅葉はそれを児童に向けてより詳細に、より具体的に示した。

エッジワースの記述する「感謝の気持ち」を

紅葉は「恩(恩義)」に書き換えてくり返す。

「恩を知らなければ畜生だ。我は畜生にはなりたくねえから」(30頁)となる。呉構は次のように漢訳した。「我但知不知道恩怨的乃是畜生。我都不能做畜生般的人(恩と仇を知らないものは畜生だと俺は知っているだけだ。俺は畜生のような人間にはならない)」(18頁)

エッジワース原作のシーザーは自己犠牲を躊躇しない。紅葉はそれを受け継ぎながら独自に、なおいっそう先鋭化させる。

奴隷たちは農園主に虐待されている。ヘクターが首領となって白人皆殺しの計画を立てた。その背後には魔術師エスターが薬物を利用してヘクターたちを扇動し指図しているのだ。コロマンティンは奴隷反乱を指導した部族であることが知られる。魔術師(オビア)は呪術師といっても同じ。対白人反乱の精神的支えとなり同時に指揮もとった(西出4頁)。それがエッジワース原作に登場している魔術師エスターである。

反乱のことを知ったシーザーは恩人エドワーズ一家をなんとしても救い出したいと願った。エッジワースはシーザーが友情と恩義のふたつに挟まれ揺れ動いたとすでに書いている。「死んだほうがましだ」とも言った。そこを紅葉はより具体的な提案という形で読者に示す。紅葉独自の解決策だ。恩人のエドワーズ一家を助けるかわりにシーザー自身の命を差し出すとヘクターに持ちかけたのである。対立した問題を解決するには自己犠牲しかありえないというのだ。次の記述はエッジワース原作には存在しない。

【紅葉】へくとる、無理な事は頼まねえ、我を殺して旦那の一家だけを助けてくれ。不承だらうが身換に志いざあの首を取つてくんねえ。31頁

【呉構】海克道啊。那没情没理的事。須幹不得。還不如殺殺我。前去幫助我那家主人。你若不允。我也能自己取下我的首級来。19

頁

ヘクトルよ、情理のないことはどうしてもできないというなら俺を殺してくれ。そうして俺のあの主人一家を助けてくれ。それがだめというなら俺は自分の首を取ることでもできるんだ。

呉禱は紅葉日訳の後半部にある「首」「取」という漢字に頼って漢訳したらしい。日本語に書いてある主語述語の関係を把握できなかった。自分で自分の首を取る、は自殺することだ。「殺せと命じる」と「自殺する」は動作主が違う。ただ自分の命を差し出すという点では一致する。

のちに天宝宮人編串「(改良戯劇) 義侠記(一名黒奴報恩)」(1907-08)はこの呉禱の誤解を取り入れた。シーザーが自殺する場面を創造したのだ(別稿参照)。

【紅葉】今までの友誼をおもつて、我が一生の願へだから、どうぞえどうあ、ど一家の命ばかりは助すけてくれ。此處でお前の手に懸かれば、旦那への恩報じは出来、お前方への義理も立ち、こんな嬉しい事はありやしねえ。さあ突くなり、斬るなりと、好きなやうにして殺してくれ。31-32頁

【呉禱】也須念咱們這多時的交情。喳。愛德華一家性命。總求你們救助。這時候我的性命。都在你手辺。著啊。快些斬。快些劊。快些莫要容情殺了。19頁

これまでの俺たちの友誼をぜひ考えてくれ。さあ、エドウア、ド一家の命は助けてくれ。今俺の命はお前の手にあるぞ。それ、早く斬れ、さあ切り刻め。早く容赦なく殺すんだ。

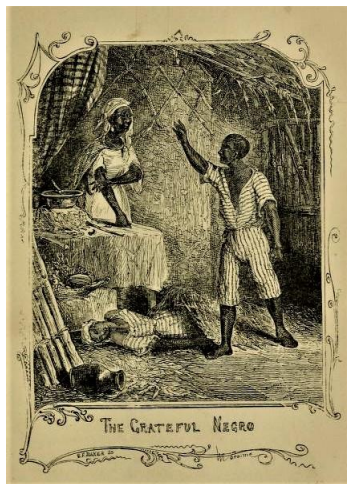
主人への報恩と友人への義理(友情)を両立させるにはどうするか(呉禱漢訳では報恩部分がない)。対立を解消して問題を解決するには

自分が死ぬよりほかに選択肢がない。この瞬間に紅葉の中でシーザーは死ぬという運命が決定した。そこで読者に予告した。「志いざあは彼(ヘクター)の心の動かすべからざるを知りて、再会を刀刃の間に期せむことの已むを得ざるを覚悟せり」(34頁)である。呉禱は漢訳して「西查知道再三勸説。不能動他的心。非得和他刀兵相見。万不能已」(21頁)に直訳した。

エッジワース原作とは離れてしまうのは当然だ。これが紅葉日訳の最後部分において原作を改変する伏線となっている。

## 8 紅葉による改変

妻クララは魔術師エステルに呪術をかけられた(紅葉訳の桂舟画では魔術師エステルを白人の老女に描いている。誤解だろう。原作1867年本の挿絵は黒人の魔術師だ)。



e1867魔術師とシーザー、失神するクララ

桂舟画 魔術師とクララ

反乱の計画は知らされずヘクター側につくようにシーザーを説得する役割を与えられたのだ。ふたりの命はないと脅された。ついでながらひとこと。紅葉は魔術師 Obeah を「おびあ」(36頁)、魔法 Obi を「おびい」(37頁)と表記する。この単語はエッジワース原作では脚注

にのみ見られる。紅葉は脚注を含めて読み込んだことがわかる。

受けた恩に報いる(報恩)はエッジワース原作にある。紅葉はその方向を踏まえながら彼独自の変更を加えた。クララを巻き込んで過激に走らせる。次の会話はエッジワース原作とは遠く離れる。呉禱はほとんど直訳しているからそれを添える(29、32頁)。

【紅葉】志いざあは遽に容を正し、声を励まして、(西査忽然正色。厲声数説。)

「くらゝ、死んでくれ! (「クララ死了罷了)」

「何だえ? (「這是怎麼説……」) (這声氣非情凄切。叫人難聞(注: 呉禱の追加。その口ぶりは凄絶だったから聞くに耐えなかった))

志いざあは平然として、(西査依旧坦然。)

「我は死ぬ覚悟だ。(「我已預備死咧」)

くらゝの心の半は死せり。(「クララ那時。也和半死一樣。)

「お前それはどういふ事情で? (「那箇。到底為什麼事情。……」)

「大恩のある旦那様は殺されねえ。48-49頁(「如此。大恩人。愛德華老爺。就不致被殺了」29頁)

(中略)

「かうして夫婦一處に暮らしてゐる、御恩を私は忘れは志ないよ。(「慙地。俺夫婦在一夥過活。我也不忘你的恩」(注: 你是他の誤解))

「好く言つた。(「説得好啊」)

「私はお前とならば死ぬよ。(「我若變做你。情願死了罷休」(注: 「お前とならば」を「私がお前ならば」と誤解))

志いざあは満足したる気色にて、(西査很為高興。很為滿足。)

「死んでくれるか。(「情願死嗎」)

「立派に死ぬよ。(「死了強得多」)

「立派に! 立派にとは好く言つた。それでこそ志いざあの女房だ。52-53頁(「強! 強! 強的話。説得更好。那纔真是。西査的妻子」32頁)

エッジワース原作ではクララはあくまでもシーザーの背後に置かれる。シーザーはコロマンディン族で勇猛果敢だ。クララはエボエ族でもとから心優しく内気な人物として設定されている。だから魔術師エスターに操られるままの被害者にすぎない。しかし紅葉はエボエ族を翻訳せずに無視した。そればかりか加筆改変によって夫とともに死を覚悟する意志強固な賢妻に変身させた。戯曲「義侠記」ではさらに変化する(別稿参照)。

#### 最後部分の巧妙な改変

紅葉の考えではシーザーの命は失われるものと決定している。そのために辻褄があうように原作を改変する必要が生じる理由だ。

反乱を実行する直前にヘクターたちは魔術師の小屋に集合した。シーザーはヘクターを説得するためにエドワーズを案内してそこに赴いた。反乱をやめればヘクターの命は助かるという交換条件である。小屋に火が放たれたことに気づいたヘクターは飛び出す。彼の眼に飛び込んできたのはシーザーの姿だ。反射的にナイフを胸に突き立てた。これが原作だ。

【原文】Hector, incapable at this instant of listening to anything but revenge, sprang forwards, and plunged his knife into the bosom of Cæsar. The faithful servant staggered back a few paces: his master caught him in his arms. "I die content," said he. "Bury me with Clara."p.418

ヘクターはこの瞬間、復讐以外のことに耳を傾けられなくなり、前に飛び出しナイ

フをシーザーの胸に突き刺した。忠実なしもべは数歩後ずさりすると、主人は彼を抱きかかえた。「満足して死にます」と言った。「クララと一緒に埋めてください」

ヘクターがシーザーをナイフで刺したのは目の前にいたからだ。もともとエドワーズを狙ったわけではない。またシーザーが主人エドワーズを危険から守ろうと身を投げ出したのでもない。しかし紅葉にしてみればその偶然を必然にする必要がある。書き換えてエドワーズを前面に突き出した。ヘクターがエドワーズに向かって切りつけたことに改変したのである。呉構漢訳を添える。ほぼ直訳だから訳さない。違うところには注をつける。

【紅葉】 へくとるは廬の後なる物音を聴咎めて、突如と躍出づれば、忽ち眼に入る白

人種！（海克道忽然聽見屋後漸有索聲。出人不意。撲的跳躍出去。陡的白人種形影。映眼簾之内。……只聽。）

「おのれ！（我……）」

といひ様小刀を閃かしてえどうあゝどに斬付けむとしたりけるを、（刀光一閃。向愛德華身上撲来。又聽。）

「へくとる待て！（海克道慢著）」

と呼びかけたる、志いざあの姿を見ると斉しく駈寄りて、（話声未了。接著西查挺身趕在愛德華前面（注：志イザアがエドワア、ドの前に立ちふさがったので、とより詳細にした）。海克道又喊。）

「思ひ知れ！（奸徒。俺知道……）」注：俺は知っている、と誤訳する）

と只一突に、心頭深く貫きね<sup>ぬ</sup>。89-92頁（略啞（注：擬音、ズバ）只一下一刀正中西查當胸。）52頁



挿絵／口絵の構造は似ているが細部は違う

「克拉拉」

シーザーが白人をかばったからヘクターは彼を刺した。そこでシーザーの叫びにつながる。

と一声叫びしが、敢無く息は絶えにけり。92頁（一声哀叫。敢是断了氣。一息全無）53頁

【紅葉】「旦那様、これが御恩返し、／くらゝ！（「老爺。這是小人報答大恩」／又

強引な変更だがこれで前後のつじつまが合う。原作を知っているから巧妙だという理由だ。

結 末

エッジワース原作の結末は次のとおり。

シーザーは失血したが致命傷ではなく昏睡状態から蘇生した。クララは魔術師が投与した毒(アヘン剤)の効能が切れて覚醒した。ヘクターが死んだとは書かれていないから生き延びて逃亡したのだろう。殺されたのは農園の残忍な監督デュラントだけだった。穏健派エドワーズは反乱が島の他の地域に広がる前に鎮圧した。残忍な農園主ジェフリーズと妻は全財産を失いイギリスに帰国して没落した云々。

奴隷制度を擁護する穏健派のエッジワースにしてみれば残忍とはいえジェフリーズを殺すに忍びなかった。せいぜいが追放ですんだのは意外なことではない。シーザーは刺し傷から回復したからそれとの兼ね合いもある。

ジャマイカにおける奴隷の反乱は穏健派エドワーズによって鎮圧されたとくり返す。奴隷制度はその後も継続されたということだ。エッジワースは奴隷制反対派ではないから予想された結末である。

紅葉も「じふえりい夫婦は命からがら本国に遁降りて後は、見る影も無く貧窮して、人其終を知らずとなむ」(93-94頁)と訳して結びとした。ここに変更はない。エッジワースの結末を受け継いだ。呉構も同様。「都菲里夫婦。幸得逃命。遁回国。後來聴説貧窮到万分。連箇影子也不見了」54頁

紅葉の加筆

紅葉は独自にいくつかの話柄、単語を加筆した。狼報恩物語のほかにあるいくつかを示す。

細かなところでは「ぶりゆ山(ざん)」(71頁)がある。呉構はそのまま「布利由」(42頁)とする。これはエッジワース原作には出てこない。ジャマイカにある最高峰の山ブルー・マウンテン Blue Mountain である。現在ではブルー・マウンテン・コーヒーで有名だ。原作にない山

名を出したのは紅葉の知識が確かなものであることを示している。

あるいは魔術師エスターがクララを襲わせた四足ある蛇(76-77頁)だ。「五尺(約1.5メートル)」の蛇足ならばオオトカゲかと思う。この数字が単位(全集でも同じ)は間違いだろう。挿絵を見れば5メートル以上はありそうだ。どのみち魔術師のことだから怪物も取りだす。



紅葉挿絵：蛇にまかれるクララ、シーザーは魔術師を取り押さえる

紅葉は奴隷に白人を「毛唐人」「毛唐」(26頁)と呼ばせている。奴隷が農園主の白人を「毛唐」と罵る。違和感のある箇所である。なぜなら日本では西洋人を蔑視してその呼称を使用するからだ。『俠黒児』に同時収録された泉鏡花「金時計」がある。日本人を侮蔑し騙した外国人に対して反抗報復する若者を主人公とする。この作品でも外国人を「毛唐」と呼んでいる。

同じ使用法だとすると奇妙に感じる。日本人

のいう差別語をジャマイカの奴隷に使わせているからだ。紅葉の目線が奴隷に置かれていることが確認できる。しかしその言葉はシーザーの白人主人に対する尊敬と相反する。主人エドワーズは例外としているというのならばかまわない。

紅葉が追加した「毛唐人」「毛唐」を呉構は「二毛子」(16頁)と漢訳した。この呉構漢訳「二毛子」はもっと奇妙だ。日本語の「毛唐」は漢語では「大毛」「毛子」あるいは「洋毛子」「洋鬼子」という。「二毛子」は西洋人(毛子)の手先になった中国人を指して罵る単語だ。もうひとつは、昔、中国とロシア人の混血児をそう呼んだという。紅葉日訳に中国とロシア人の混血児など存在しない。だからそう理解するのは当たらない。「二毛子」は誤植ではないかと初出『東方雑誌』、また後刷りの初集本を見たがそのままだった。

ジャマイカの奴隷が白人を蔑視したのを漢訳して呉構が「毛子」を使用するのであれば納得する。またそう漢訳すべきだった。しかし「二毛子」はもともと西洋人の手先という意味であって西洋人そのものではない。不適切な訳語だ。この誤訳を根拠にして日露戦争と関連づけて論じることは成り立たない。

気になるといえば言語だ。アフリカから連れてこられたシーザーが農園主のイギリス人と英語で会話している。賢いシーザーだから短期間の間に習得したということだろうか。原作者は説明していない。紅葉も書かない。

それにしてもエッジワースの頭の中にはジャマイカの原住民は存在しないらしい。不思議に思わないこともない。

## 9 結論——紅葉改変の結果

エッジワースは奴隷制度を擁護する穏健派に属する。彼女が「感謝する黒人」において提示したのは恩義と友情の対立だ。それを主題に設定した。シーザーはその間で揺れ動き、最後は

恩義を選択して友人ヘクターとの関係を断つ。その代償はヘクターからのナイフの一刺しだ。しかし致命傷でなく生き返った。

残忍な農園主ジェフリーズは「感謝する」すなわち「恩義を感じる」黒人は存在しないと信じていた。しかしシーザーという例外があるではないかというのがエッジワースの主張だ。ゆえに物語は次のように締めくくられる。

【原作】 Our readers, we hope, will think that at least one exception may be made, in favour of THE GRATEFUL NEGRO. p.419

私の読者たちが、少なくとも例外がひとつある、とこの本作「感謝する黒人」を支持してくれるように望みます。

この文章は物語冒頭に示された「黒人は劣等種であり、感謝の気持ちを持つことができず the negroes as an inferior species, incapable of gratitude」と完全に呼応している。さらに作品名になっていることは言うまでもない。

シーザーだけが「感謝する黒人」の唯一の例外であるとエッジワースは断言する。彼女は奴隷制度を擁護し黒人を差別しているからその唯一例外を特に顕彰した。彼女にしてみれば当たり前のことだ。現在から200年以上も前に、奴隷制度が存続していた時代に書かれた原作だ。これを忘れるべきではない。当時は常識だったかもしれないが現在は違っている。それだけのことだ。現代の読者がそこに違和感を持つのは不思議ではない。むしろその事実を見ようとしなないことの方が奇妙だ。

紅葉はこの最後部分を翻訳していない。ゆえに呉構漢訳にもない。

紅葉はエッジワース原作を直訳はしなかった。ただし原作の基本構造と大筋は守って物語っているのが事実だ。抄訳ではない。いくつかの小規模な省略、加筆、改変を自由に行なっている

から翻案ということになる。

くり返す。紅葉日訳では小さい個所であるにしても重大な変更が1カ所ある。それを見逃すことはできない。確認しておく。

エッジワース原作ではシーザーが「満足して死にます I die content」といい「クララと一緒に埋めてくれ Bury me with Clara」と叫んで倒れはしたが死にはしない。それを紅葉は「旦那様、これが御恩返し」とシーザーに叫ばせ死亡させた。紅葉の変更で物語は報恩という部分で原作よりもさらに劇的効果を発揮したといえる。日本の児童たちに向かって報恩を強調するためには主人をかばうシーザーの死が必要だったからだ。しかしそれによって物語に不具合が生じた。

エッジワースの物語ではシーザーは奇跡的に回復した。また片方の残忍な農場主ジェフリーズも殺されずに逃亡するだけだ。シーザーとジェフリーズの両者をともに生きさせて釣り合いをとった。ところが紅葉はそれを改変してシーザーは死に、一方でジェフリーズは生きのびさせた。それによりエッジワースの物語世界は平衡を失うことになった。

## 10 まとめ

エッジワース原作と紅葉日訳を比較対照した。承認継承した個所と加筆改変した部分をまとめる。

1 エッジワースはジャマイカの奴隷制度について擁護する穏健派だ。紅葉はそれを容認する。

2 エッジワースは作品登場人物の残忍なジェフリーズに黒人を劣等種だと認識させていた。穏健派エドワーズも同様だ。紅葉はエッジワースの認識を超える天賦人権説を提示してはいる。しかし結局のところエッジワースの考えに反対はしない。

3 エッジワースは作品の主題を恩義と友情のはざままで苦悩する人物に定めた。奴隷制度は

背後に押しやった。紅葉はそれを把握している。ゆえに紅葉日訳は奴隷制について多くを省略する。

4 「感謝する」奴隷のシーザーは命の恩人ジェフリーズのために命を捨ててもよいという気持ちを有する。このエッジワースの設定を紅葉も受け入れた。

5 エッジワースのいう「感謝の気持ち」は「恩(恩義)」と同じ意味だ。それを踏まえながら紅葉はエッジワース原作にはない狼の報恩物語を加筆した。恩義に報いる精神を強調するためである。

6 エッジワースはシーザーに友情を捨て恩義のために死んでもしかたがないと覚悟させた。紅葉はそれを継承してさらに彼独自の変更を加えた。シーザーはヘクターに向かって恩人エドワーズ一家の命を助けるために自分を殺せと要求する。エッジワース原作にはそれほど強い発言は存在しない。

7 エッジワース原作では穏和で消極的な女性クララだ。しかし紅葉は書き換えてクララに「私はお前とならば死ぬよ」と言わせた。それにより紅葉はシーザーが死の方向に進むように一層強めた。

8 ヘクターは目の前のシーザーを反射的にナイフで刺した。それを紅葉はヘクターがエドワーズを狙ったことに加筆改変した。シーザーが死ぬのは恩人エドワーズを助けるためだという理由が必要だったからだ。

9 エッジワース原作ではシーザーは生き返る。紅葉はそれを改変して死なせてしまう。そうなるこそ恩義のために命を投げ出すという論理が完結すると紅葉は考えた。

10 シーザーは生き返り残忍なジェフリーズは逃亡する。原作はそれで平衡を保っている。だが紅葉は報恩論理を優先し強調したかった。そのためシーザーが死ぬという変更を行ない、エッジワースの物語世界を破綻させた。

11 奴隷反乱はエドワーズにより鎮圧された。

ジャマイカの奴隷制度は存続するとエッジワースは示唆する。紅葉もそれを受け入れて何も説明しない。

12 反乱が鎮圧された後のことだ。白人から奴隷に対してさらに苛酷な虐待があると紅葉は理解していた。ゆえにそう加筆して説明した。ここは紅葉の優れた加筆だ。原作者のエッジワースは知らぬ顔をして素通りした。穏健派らしい無視のしかただといえる。

## 11 呉構漢訳について

呉構漢訳についていえば紅葉日記をほとんど直訳しているといっている。ゆえに上の「まとめ」はすべて呉構漢訳に当てはまる。

呉構漢訳の別作品を見れば組版の体裁については一定していない。段落を無視し、会話もカッコを使わないものもある。その時々によって異なっている。本漢訳においては段落、会話を示すカッコなども紅葉日記をほぼ忠実に反映している。(初版で紅葉は終わりカッコ(」)を使用しないが呉構は使う。後の『紅葉全集』本は終わりカッコを使用)。

引用文で注したように小さな誤解、加筆はある\*10。しかし物語の大枠は維持されているのが事実だ。

エッジワース原作と紅葉日記の共通点と異同点をさぐった。さらにそれを呉構がどのように漢訳したか、その実態を検証した。その結果は本稿に示したとおりだ。漢訳として上質の部類に入る。

ひとこと。

呉構は紅葉日記『俠黒児』を漢訳したが自分の意見見解を加筆挿入していない。加筆を実施した漢訳『賣国奴』とは異なる。本漢訳において呉構の存在はいわば透明だ。別の表現をすれば日本の伝統芸でいう「黒衣(くろご)」である。作業をしているが約束事として観客(読者)からは見えない。清末民初では原作、底本に関係なく勝手に書きかえる訳者が存在する。それ

らに比べれば黒衣役に徹した呉構の本漢訳の質は高いと評価している。

漢語論文を読んだ。その中の1篇はエッジワース原作を見ている。そこはとてもよい。ところが原作に書かれていることをそのまま読み取っていない。

漢語論文の論者は原作が「種族平等」と「人道主義精神」を賛美していると誤読する。エッジワース原作は奴隷制度を擁護しているのだからそれはない。前出の土佐は誤解して「人種差別の不当を説き人道主義を唱えるところに原作の主眼があった」(9頁/修正稿67頁)と書いた。それを引用したのではないか。

漢語論文の論者は紅葉日記について「種族矛盾」を強化し「任侠道徳」を宣伝し主人のために殉死する「武士道精神」を賛美しているとまとめる。日本人が改作すれば黒人の死去も「武士道精神」になるということだろうか。突然に「武士道」が出てきていぶかる。こちらについても先例があった。同じく土佐が「壮烈な武士的道義の強調と美化」(9頁/修正稿66頁)と書いた。それと似ている。

紅葉日記において白人の命乞いをするシーザーをヘクターが罵る場面がある。「恥しらず！業曝し！奴等(うぬ)、黒人の面汚し！腰拔野郎の大癡漢(おほだわけ)！」(28頁)。「腰拔野郎の大癡漢！」を呉構は「二毛子的漢奸……」(17頁)と漢訳した。そこをとらえて漢語論文の論者は「漢奸(売国奴)」批判をしていると解釈した。そこから呉構漢訳が「黒人奴隷の境遇に同情し復讐の怒りを燃やして共に外敵の侵入を防ぐ」考えを表現していると結論する。

既述のとおり日本語の「毛唐」を「二毛子(西洋人の手先)」にしたのは呉構の誤訳だ。それを無視して後ろの「漢奸(売国奴)」のみを取りだすのは不適切である。ひとつの単語だけを根拠にして漢訳全体をまとめている。拡大解釈である。売国奴批判というのは論者の勝手な認識にすぎない。



紅葉日記を漢訳したのだから主題も同じく恩義と友情である。その両者に別々の主題を見るのは論者の読み間違いだ。ここにこそ底本とした日記を正確に漢訳したかどうかを冷静に検討する姿勢が必要とされる。独自の立論を提出し

ようと急ぐあまり、あつてほしい虚像を勝手に作り上げているといわざるをえない。残念なことだった。

別稿「天寶宮人「(改良戯劇) 義侠記」——吳禱『侠黒奴』との違い」に続く。 罇

名詞対照表

MARIA EDGEWORTH	紅葉	吳禱	備考
Edwards エドワーズ	えどうあゝど	愛徳華	穩健派農園主←ブライアン・エドワーズから
Abraham Bayley ベイリー	べいれい	貝礼	穩健派監督
Cæsar シーザー	志いざあ	西查	心賢い奴隷、ヘクターの親友、コロマンティン族
Coromantyn コロマンティン	ころまんちん	克洛曼丁 17	コロマンティン族
Clara クララ	くらゝ	クララ	シーザーの恋人、妻エボエ族
Eboe エボエ	×	×	エボエ(イボ)族
Jefferies ジェフリーズ	じふえりい	郝菲里	残忍な農園主
Durant デュラント	ぢゆらんと	仇狼特	残忍な監督
Hector ヘクター	へくとる	海克道	奴隷反乱の頭領、シーザーの親友、コロマンティン族
Esther エスター	えすさあ	威斯薩	魔法(毒)使いの老婆、白人退治の元帥
脚注 Obeah オビア	おびあ	悪批巫	魔術師
脚注 Obi オビ	おびい	魔法、法術	魔法
Jamaica ジャマイカ	じやめいか	哲美加	カリブ海のジャマイカ
×	ぶりゆ山(ざん) 71	布利由 42	Blue Mountain ジャマイカにある最高峰の山

【参考文献】注に示した論文は簡略化して示す。ジャマイカ関係は注9を参照のこと。  
 中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学(2)」1950(注に表示)  
 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資料を中心として——2」1964(注に表示)  
 土佐 亨「尾崎紅葉「侠黒兎」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」1971.3.1。村松定孝ほか編『日本児童文学研究』1974(注に表示)  
 上村真代「マライア・エッジワース“The Grateful Negro”:尾崎紅葉『侠黒兎』の原作として」『比較文学』創刊号 文化書房博文社1995.9.2、237-

257頁  
 齊藤 愛「異貌の自画像——尾崎紅葉『侠黒兎』と Maria Edgeworth, ‘The Grateful Negro’」日本比較文学会編『比較文学』第39巻 1997.3.31 電字版  
 大嶋浩編著「日本におけるマライア・エッジワース書誌」2001/2020(注に表示)  
 李 敏永「尾崎紅葉『侠黒奴』試論——The Grateful Negro との比較考察を通して」『藝文研究』第90号 慶應義塾大學文学会2006.6.1。112頁  
 酒井美紀『尾崎紅葉と翻案——その方法から読み解

- く「近代」の具現と限界』日本・花書院  
2010.3.10
- 趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以吳  
禱《小説月報》前期(1910-1920)翻譯作品為例」  
『中国近代文学学会小説分年會暨中国近代小説学  
術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9
- 崔 琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——  
以吳禱漢訳《侠黒奴》為中心」『中国現代文学研  
究叢刊』2014年第3期(総第176期)2014.3.15
- 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——  
以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明  
清小説研究』2018年第4期(総第130期)  
2018.10.15
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』  
第133号 2019.4.1
- 山田有策ほか編『尾崎紅葉事典』2020(注に表示)

【注】

- 1) 中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学(2)」『天  
理大学学报』第2巻第1・2号 1950.11.26
  - 2) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資  
料を中心として——2」『山辺道』第10号  
1964.1.25
  - 3) 山田有策+木谷喜美枝+宇佐美毅+市川紘美+大屋  
幸世編『尾崎紅葉事典』翰林書房2020.10.28
  - 4) 土佐亨「尾崎紅葉「侠黒児」とエッジワース  
「恩がえしをした黒人」」解釈学会編『解釈』第  
17巻第3号(総第191号)解釈学会 1971.3.1。初  
出5頁には言及なし。のちの修正稿は村松定孝+  
上笠一郎編『日本児童文学研究』三弥井書店  
1974.10.1所収の61頁。
  - 5) 大嶋浩編著「日本におけるマライア・エッジワ  
ース文献書誌」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻  
第2分冊 2001.2.28 電字版。42頁。単行本は大  
阪教育図書2020.3.20。34頁
  - 6) 『集英社 世界文学大事典 1』1996.10.25
  - 7) 1767年とするのは土佐亨のほかには次の文献があ  
る。  
THE HON. EMILY LAWLESS “MARIA  
EDGEWORTH” LONDON: MACMILLAN &  
CO., 1904. p.3. “She was born on the first day of  
the year 1767, …… (後略)”。
- また『岩波 西洋人名事典 増補版』(岩波書  
店1956.10.16 / 1981.12.10 増補版第1刷)は  
「Maria 1767.1.1-1849.5.22」255頁。
- 『英米文学辞典 第三版』(研究社出版株式会  
社1985.2.28)は「Edgeworth, Maria (1767-  
1849)」373頁。
- 『児童文学事典』(東京書籍株式会社1988.4.8)  
は「エッジワース マライア Maria Edgeworth  
一七六七〜一八四九 一九世紀のイギリスで最も  
よく読まれた児童文学作家の一人」92頁。三宅  
興子執筆
- 『岩波=ケンブリッジ 世界人名辞典』(岩波  
書店1997.11.21)は「エッジワース, マライア  
Edgeworth, Maria (アイルランド 1767-1849)  
159頁
- ハンフリー・カーペンター+マリ・プリチャー  
ード作、神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童  
文学百科』(1999.2.10/6.10三刷)は「エッジワ  
ース, マライア EDGEWORTH, MARIA (1767-  
1849)」102頁。西村醇子訳
- 8) 『大衆物語集 POPULAR TALES』の版本は次を  
見た。挿絵のある版本には★印をつける。1804  
第3巻(193-240頁)、1805、1807、1813、1814、  
1823、1832、1853、1856 (LONDON: SIMPKIN,  
MARSHALL, AND CO. ほか。399-419頁。本稿  
で使用する)、1862、1865★、1866★、1867★、  
1875、1887、1895★など。初版には挿絵がない。  
挿絵を掲げるものは後刷りだ。特に言えば1895  
★は紅葉1893の挿絵と比較することはできない。  
刊年が前後するからだ。
  - 9) 以下を参照した。  
ラス・カサス著、染田秀藤訳『インディアスの  
破壊についての簡潔な報告』岩波文庫1976.6.25  
エリック・ウイリアムズ著、中山毅訳『資本主  
義と奴隷制』ちくま学芸文庫2020.7.10  
西出敬一「ジャマイカ・マルーンの遺産とアイ  
デンティティ」徳島大学総合科学部『人間社会文  
化研究』第17巻 2009 電字版  
川分圭子「奴隷貿易廃止期のイギリス議会と西  
インド利害関係者」京都府立大学学術報告『人文』

第63号2011.12 電字版

10) 誤解と加筆の例を少しだけ示す。

誤解1: 「志いざあは項を丁と拵ち」35頁→  
「西査故意將脖子望裏一縮。變成丁字形」21頁。  
副詞の「丁と(ばしつと)」が理解できなかった。  
同じく「婢の額を丁と踢れば」(70頁)とあるが、  
こちらは「蹙蹙一下」(41頁)とした。

誤解2: シーザーはヘクターの仲間になると魔術師に嘘をつく。「今にもへくとるの見えなば、志いざあが過を悔ひて、同心したるよしを告げ給へ」(84頁)。すなわち魔術師からヘクターに告げろと言いついたにすぎない。→「西査立誓受戒之後。隨回身到海克道屋裏。告訴他自己悔了過。做他們的同心。海克道更自歡喜」(49-50頁)と実際に会って告げたと誤解した。

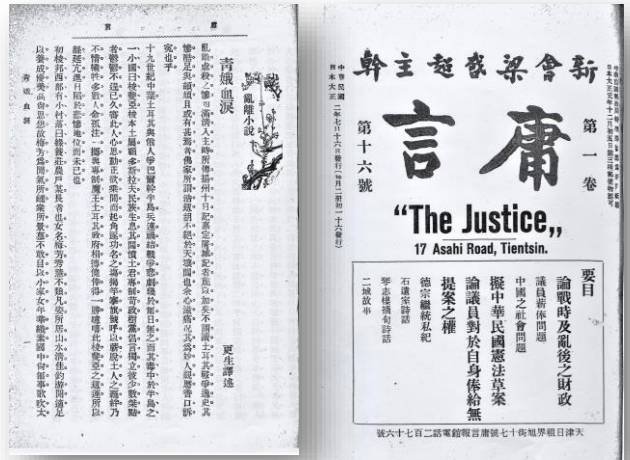
加筆1: 「就是華盛頓再生。戈蘭德轉世。對俺來說什麼」9頁。ジェフリーズが自分の考えを変えないという文脈の中だ。ワシントンとグラントの名前を出した。呉構は人名を加筆して強調するつもりだった。グラント(Ulysses Simpson Grant, 1822-1885)は南北戦争時の北軍の将軍、アメリカ合衆国大統領だ。しかし彼はエッジワースの該作が書かれた時には生まれていない。名前が出てくるはずがないのだ。呉構はエッジワース原作を知らないからしかたがない。

加筆2: 魔術師オビアを説明して「如中国張天師」(22頁)と加筆する。張道陵は奇術で疫病を退治したと伝わる。また別の個所で「梁山伯(与祝英台)」(41頁)もある。中国の故事を引用するのはゴリキー作、長谷川二葉亭訳、呉構漢訳「憂患余生」(1907)で鍾馗を出すのと同じ。読者の理解を助けるための注記だ。翻訳の許容範囲内だから非難するのは当たらない。

厚生「青娥血涙」は康有為作か

樽本照雄

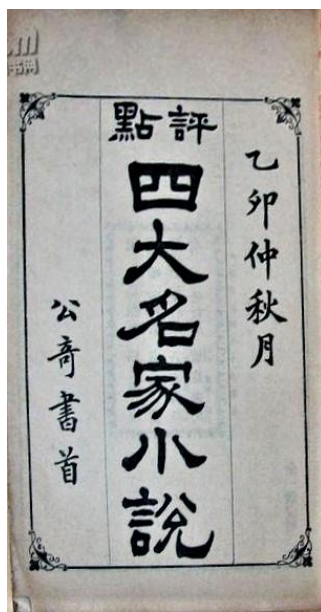
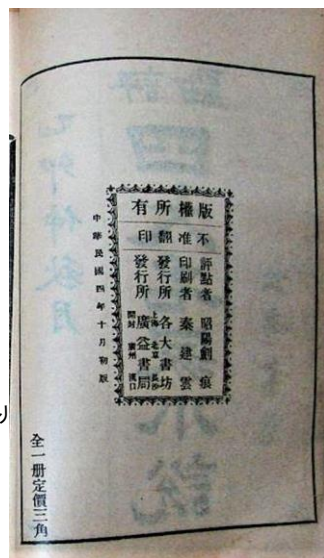
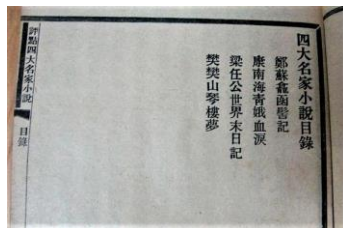
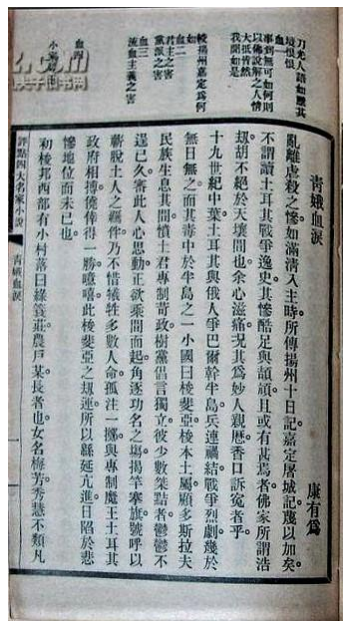
更生訳述「(乱離小説)青娥血涙」(『庸言』1巻16号 1913.7.16)がある。



本文 表紙

それが『評点四大名家小説』(上海・広益書局1915.10)に収録された\*1

該書はほかに梁啓超「世界末日記」、鄭孝胥「函髻記」、樊增祥「琴樓夢」などを収めて1冊本になっている。その際「青娥血涙」の著者は目次で「康南海」、本文で「康有為」と明記された。ならば初出の更生は康有為の別号ということになる。確かに陳玉堂『中国近現代人物名号大辞典』(2005)\*2に康有為の号として厚生がある。『清議報』『新民叢報』『丙辰』な



奥付 扉 目次 本文 孔夫子旧书网より

どに署名が見えるという (1153頁)。

それ以後、筆者の知る限り次の刊行物に収録された。

張正吾主編『晚清民国文学研究集刊』(第4輯 1996.8。連燕堂校点。「識」275頁)および于潤琦主編『清末民初小説書系・社会卷下』(北京・中国文聯出版公司1997.7.20)。『評点四大名家小説』が底本である。いずれも著者を「康有為」とする。

ということで「青娥血涙」は康有為唯一の小説作品として認められている。現在まで異論は出ていないように思う。

ところが興味深い資料があることに気づいた。黄曼編著『民初小説編年史(1912-1914)』(武昌・武漢大学出版社2021.5)に記載される。

この年表は小説に関連する新聞記事も収録する。そのひとつが『小説月報』第4巻第5号(1913.9.25)に掲載されたという許指嚴の「啓事」だ。すなわち、本人が出した告示、お知らせである。

その内容を簡単にまとめる。

「帳下美人」(『庸言報』16期の「青娥血涙」)は許指嚴自身の作品だ。弾華と更生はいずれも彼の別号というもの。

昨年、北京の友人余青萍君に売り込んでもらおうと写しを送ったが売れなかった。そこで小説月報社に送って受理された。余君は病没してしまい原稿は未回収のままだった。それが突然『庸言報』第16期の小説欄に掲載されている云々。全文は孫引きだから注に示す\*3。

こういうばあいは小説の実物を見る方が早い。本稿のはじめに示した『庸言』掲載の「青娥血涙」と『小説月報』第4巻第4号(1913.8.25)掲載の崆峒訳意、弾華潤詞「帳下美人」を比較対照した。同文であることがわかる。ということは題名の異なるふたつは同一作品だ。

初出の更生がなぜ康有為になったのか。

時間系列で見えていくと『評点四大名家小説』が原因のようだ。すなわち剣痕が「青娥血涙」を『評点四大名家小説』に収録する際にそこに

號四第卷四第報月說小

帳下美人  
 亂離。唐。毅。之。極。至。滿。清。人。主。時。如。所。傳。揚。州。十。日。記。嘉  
 定。廣。城。說。者。而。止。矣。不。謂。讀。土。耳。其。戰。爭。遺。史。其。慘。酷  
 足。與。顏。顏。且。或。有。甚。焉。者。佛。家。所。謂。劫。劫。何。絕。於。天  
 壤。間。也。余。心。滋。痛。況。其。為。妙。人。親。歷。香。口。評。處。也。乎  
 十九世紀中葉土耳其與俄人爭巴爾幹半島兵連禍  
 結戰爭悲劇於無日無之而其青中於半島之一小  
 國曰波斐亞按本上屬多斯夫拉夫氏族生息其間憤  
 士君專制政樹黨倡言獨立彼少數桀黠者營營不  
 逞已久奪此人心思動正欲乘間而起角逐功名之場  
 揭竿塞孤號以新脫土人之羈絆乃不肯犧牲多數  
 人辭孤注一擲與專制魔王土耳其政府相德倖得  
 一勝噫此波斐亞之劫運所以懸危殆進口陷於悲  
 慘地位而未已也  
 初。綾。邦。西。部。有。小。村。落。曰。綠。莊。農。戶。某。長。者。也。女。名。

『小説月報』第4卷第4号 (1913.8.25)

文娟論文を評した文章を評する

——陳鵬安論文について

荒井由美

ある更生を康有為名義に書き換えた。

許指敵名義の作品は大量に公表されている。

更生名義の作品はほかには「(寓言小説)獅子国」(『新聞報』宣統3.9.12-15未完(1911.11.2-5))があるらしい。ただしこちらも許指敵の作品であるかどうかは不明だ。

彈華名義の別作品は見つからなかった。 罍

【附記】本稿の一部は清末小説研究会ウェブサイト2021.11.15で報告した。

【注】

- 1) 孔夫子旧書網に写真あり。扉は「乙卯仲秋月」、  
「評点四大名家小説序言」は「中華民国四年九月  
劍痕識于海上寓齋」、奥付は評点者：昭陽劍痕、  
発行所：広益書局、中華民国四年十月初版。
- 2) 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編  
増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1。ただし、  
許指敵(317頁)に「厚生」は記載されていない。
- 3) 記号は黄曼のまま。「許指敵啓事：《帳下美人》  
》短篇(即《庸言報》十六期中之《青娥血淚》)  
確系本人撰著(彈華、更生均指敵別号)、客歲曾  
以副本寄京友余君青萍紹介求售、久未售出、始送  
《小説月報》社、即蒙登錄、而余君旋病故、未及  
收回原稿、茲忽于《庸言報》第十六期小説欄中登  
出、想余君已經送入該社而未及關照之、故因兩方  
面著作權之名譽攸關、用特宣言、舛錯事由一切責  
任均歸撰稿本人承担、与兩方面主任無涉。許指敵  
謹白。」264頁

はじめに

本稿の構造は簡単だ。吳構を論じる文娟論文(2018)が出発点にある。それについて2本の評論が前後して公表された。荒井由実論文(2019)と陳鵬安論文(2022)だ。

本稿では主として陳鵬安論文を取り上げる。文娟論文を評して荒井論文とはどのような違いを見せているのか。それを検討するのが目的である。

興味深いのは陳鵬安(浙江財経大学日文系)が吳構漢訳研究の専門家であることだ。博士論文「吳構翻訳研究」(北京師範大学、2020.6審査通過)があるという(未見)。吳構漢訳の専門家は文娟論文をどのように読んだのか。大いに関心がある。

文娟論文からはじまる

本稿であつかう各論文は次のとおり。番号を振る。いずれも吳構が主題となっている。

- ①文娟「試論吳構在中国近代小説翻訳史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期)2018.10.15
- ②荒井由美「吳構についての文娟論文」『清

末小説から』第133号 2019.4.1

③陳 鵬安「吳禱相關史料的新發現——兼与文娟《試論吳禱在中國近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角》商榷」『明清小説研究』2022年第1期(総第143期) 2022.1.15

陳鵬安はネットで公開されている『清末小説から』掲載の②荒井論文を見ているだろうか。読んでみると筆者は推測した。その根拠を示す。

『清末小説から』第144号(2022.1.1)に掲載された梁艷「關於吳禱訳《偵探小説》虛無党真相》的底本及其他」がある。陳鵬安は梁艷の文章について自分の博士論文と似た個所があるという。筆者は陳鵬安の博士論文を見ていないからそれが事実かどうかは判断できない。明らかなのは陳鵬安がウェブサイト公開の『清末小説から』を閲覧していることだ。梁艷論文を見ているならば『清末小説から』第133号掲載の②荒井論文も目にしているだろう。簡単な推論である(これは間違っていた)。

筆者は①文娟論文を読んでいくつかの問題点を指摘した。理解を深めるためにそれらをまとめてここに示す。なお各項目について③陳鵬安論文の言及があるかどうかを確認して附記する。記号は次のとおり。

「○陳鵬安あり」=陳鵬安も同じ個所について②荒井論文と同様のことを記している。

「△陳鵬安あり、別物」=陳鵬安は言及しているが②荒井論文とは別のことを述べている。

「×陳鵬安なし」=陳鵬安は気がついていない、あるいは無視した。

①文娟論文の問題点を挙げる。

**問題点1**：商務印書館の「説部叢書」元版の完成は1908年であると指摘した神田一三論文(2002)がすでに存在する。それがあつたことを知らないのか言及しない。/×陳鵬安なし

**問題点2**：沢本香子「書家としての吳禱(作

為書法家的吳禱)」の掲載誌、掲載年月日を明示しないのは不親切だ。/△陳鵬安あり、別物。文娟が明示していないことはいわずに沢本論文の掲載誌、掲載年月を示して引用する(36頁)。

**問題点3**：王雲五『商務印書館与教育年譜』、『商務印書館図書目録(1897-1949)』は資料として利用する価値がない。/×陳鵬安なし

**問題点4**：吳禱漢訳『賣国奴』には底本とした登張竹風『賣国奴』にはない個所を指摘したのはよい。ただしより適切な個所を引用すべきだった。/×陳鵬安なし

**問題点5**：樽本『新編増補清末民初小説目録(第3版)』を利用するが出版社名と刊年を明記していない。それよりもネットで公開している最新版(2018年当時では第10版。2022年は第14版)を使用すべきだ。/×陳鵬安なし。ただし樽目録X(第7版 2015)を使用する。35頁。第7版を見ているならば論文執筆時には第13版(2021)がすでに公開されていた。それを参照すべきだった。

**問題点6**：「商務印書館所刊吳禱訳作単行本統計表」を作成する際に利用した参考文献を明記しない。/×陳鵬安なし

**問題点7**：商務印書館「説部叢書」の元版(表紙タンポポ文様)と初集本(表紙リボン文様)の区別がついていない。元版は清末刊行、初集本は民初刊行であることを認識していないのである。/×陳鵬安なし

**問題点8**：吳禱漢訳『賣国奴』の刊行年を1903年ではなく1905年3月だとした。1903年と記述するのは陳大康だ[編年②662]。陳大康は「説部叢書」の後版である初集本奥付に誤記された1903年を信用した。初版を見て確認しなかったのが間違いの原因である。文娟は陳大康説に従わず独自に周辺の資料を探し推論した(文娟にとって陳大康は指導教授だ。名指しすることは避けたい)。しかしこのばあいは傍証を挙げる必要はない。上海図書館が所蔵する該書の初版(光緒三十一年(1905)年十一月

首版)を見れば即座に解決する。／△陳鵬安あり、別物。中村忠行論文を引用して1905年以前に1903年版が存在する可能性をいう。34頁。中村論文の誤りを信用した。なによりも『賣国奴』初版を見るべきだった。文娟と同じくその努力をしなかったのが誤りの原因だ。研究を進めるところか後退させてしまったといわざるをえない。

**問題点9**：呉禱漢訳『車中毒針』の原作者と訳者について誤解をしている。英国勃拉錫克の英文原著を石井ブラックが日本語に翻訳口述したものを今村次郎が筆記したとする。英国勃拉錫克と石井ブラックは別人という認識である。そうではない。勃拉錫克はHenry James Blackといい日本に帰化して快樂亭ブラックと称した落語家。石井ブラックも同一人物なのである。／○陳鵬安あり。英人ブラックについての説明は正しい。原作がデュ・ボアゴベであることを指摘する。しかし英語翻訳本については可能性があるというだけ。底本を提示しない(35頁)。荒井「呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針——英人ブラック『車中の毒針』』(『清末小説』第145号 2022.4.1)において明らかにした。

**問題点10**：商務印書館と日本金港堂の合弁問題を提出しているのはいい。しかしここでも典拠資料を示さないのは問題だ。また合弁の原因は日本で発生した「教科書事件」ではない。文娟は俗説を取り入れたから誤る。／×陳鵬安なし

**問題点11**：呉禱漢訳『薄命花』の原作を不明にしているのは調査不足だ。樽目録の最新版を見れば柳川春葉「虚無党の女」だと書いてある。／△陳鵬安あり、別物。樽目録Xにより春葉作品をあげる。さらにル・キュー原作を示す。35頁。陳鵬安の指摘は正しい。しかし沢本香子「呉禱漢訳ル・キュー『薄命花』——柳川春葉「虚無党の女」の原作」『清末小説から』第143号(2021.10.1)においてすでに明らかにしている。

**問題点12**：呉禱漢訳『侠黒奴』について述べた個所に崔琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以呉禱漢訳《侠黒奴》为中心」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総176期)2014.3.15)の文章と重なる部分がある。自分と他人の文章は厳密に区別する必要がある。／×陳鵬安なし

**問題点13**：周作人が呉禱漢訳『賣国奴』について発言していることをいう。ならば周作人が自分の「侠女奴」を改悪していることも説明すべきだ。／×陳鵬安なし

以上を書き出してみれば文娟論文には問題点が多いと理解できる\*1。

### 陳鵬安論文の指摘と新発見

②荒井論文が指摘した問題点に対する③陳鵬安の反応を上にも△○×で示した。ほとんどが×だ。どうやら陳鵬安は見ることのできた②荒井論文の存在を知らずに立論してしまったようだ。では陳鵬安自身は①文娟論文についてどのような指摘をしたのか。次に「指摘」「新発見」に分けて箇条書きにする(順序は入れ替えた)。

**指摘1**：『黒衣教士』の原作者表記の溪崖霍夫を溪岸霍夫と誤記する。35頁

**指摘2**：『侠黒奴』の日訳底本を1892年と誤る。また『侠男児』は間違いで『侠黒児』でなければならない。35頁

**指摘3**：『薄命花』の英文底本はWilliam Le Queuxの*Stolen Souls*中の1篇*The Soul of Princess Tchikhatzoff*だ。35頁。ただし出版社不記。沢本香子「呉禱漢訳ル・キュー『薄命花』——柳川春葉「虚無党の女」の原作」『清末小説から』第143号(2021.10.1)において指摘している。

**指摘4**：『侠女郎』の底本である押川春浪作品は[博文館]1907年ではなく『英雄小説大復讐』本郷書院1912である(ここは渡辺浩

司を引用する)。また未発表の「学生捉鬼記」は同じ本郷書院本に収録される「探険小説 幽霊小家」と推測される。36頁

**指摘 5** : 「斥候美談」の英文底本について“*The Crime of the Brigadier*”を高須梅溪は採用したはずだ。しかしどの版本かはわからない。37頁。樽本照雄「呉構漢訳ドイル「斥候美談」——高須梅溪訳「大佐の罪」『清末小説から』第145号(2022.4.1)において問題はすでに解決している。

**新発見 1** : 西湖天涯芳草館主「書恨并引」『遊戯報』1899.4.7、「書恨并引続前稿」『遊戯報』1899.4.12がある。36頁

**新発見 2** : 德国摩哈孫著、中国芳草館重訳『虚無党真相』1908再版。原作は塚原洪柿園『虚無党』『続虚無党』国民書院1904.12、1906.2がある。36頁。これについては梁艶「関于呉構訳《偵探小説》虚無党真相》の底本及其他」『清末小説から』第144号(2022.1.1)が発表されている。

**新発見 3** : 甯中呉構訳述「仏教歴史問答」『仏学叢報』第2、3、5期 1912-1913。底本は日本永井龍潤『通俗仏教歴史問答 印度之部』興教学院1902。37頁。注に示した文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』109頁注①に記載がある。ただしこちらの掲載号は第5期1913のみ。

**新発見 4** : 钱塘呉構「警告争路権之同胞」『時報』1907.12.22-23という時評文がある。37-38頁

**新発見 5** : 『華安雑誌』1919-1920に天涯芳草名で小説「淞浦強濤記」「新東厨司令登庸記」「寓言小説黄龍陣」「社会実写小説弱女救災記一名歳寒松」の4篇を発表している。いずれも保険業務を宣伝するもの。該誌は上海華安合群保寿股份有限公司の編集する非買品の雑誌。38-39頁

**新発見 6** : 『華安雑誌』の表紙には呉構署とある。

上記のとおり新発見が6件ある。保険加入者に配布した非売品の『華安雑誌』を発掘したのがすばらしい。雑誌の表紙に揮毫しているらしい。これはぜひとも写真で示してほしい。それがあれば書家としての呉構という認定がより確実なものになったはずだ。(孔夫子旧書網に写真がある。それを掲げる)



『華安雑誌』第6期 第9期

陳鵬安は呉構『賣国奴』の1905年初版の実物を見ていないことから1903年刊行の可能性を強調した。それを除けば上のようにいくつもの新発見がある。問題の多い文娟を掲げて副題とする必要はなかった。呉構に関する文献を新発見したことを前面に出した方が理解しやすいし独特のものになったと思う。

呉構漢訳研究の専門家としてふさわしい成果をあげている。陳鵬安論文には高い評価が与えられるべきだと考える。 ㊦

【注】

- 1) 文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』(桂林・広西師範大学出版社 2021.6)がある。該論文はそのうちの第3章第4節「二、日文転訳の代表：呉構」として収録された(文娟は呉構と『繡像小説』については第5章



で詳しく述べたという)。ほぼもとの文章のままである。②荒井論文が指摘した多くの問題点は度外視した。しいていえば問題点10の商務印書館と日本金港堂の合弁原因について「教科書事件」を取り消したことくらいだ(122頁)。ただし67頁注①に葉宋曼瑛の論文を示して「教科書事件」によって金港堂が商務印書館に投資したとのべる(苦境にあった金港堂がどうして清末の出版社、それもよりによって経営の傾きかけていた商務印書館に投資する必要があるのか。葉宋曼瑛の論理には整合性がない)。同時に樽本「辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資経営」では両者の合弁に「教科書事件」は関係ない、と引く。両論併記して文娟の思考は停止している。

訂正していない例をあげる。

121頁に「商務印書館所刊吳構訳作単行本統計表」を掲げたのは以前と同じだ。商務印書館「説部叢書」には清末の元型と民初の初集本がある。過去に何度も指摘している。文娟はその区別をしなかった(問題点7)。指摘されると文娟は著書の該当箇所に必要な注釈をつけた。「本統計表中“説部叢書”所収吳構作品編号, 按照四集系列統計」121頁。「四集系列」の集編番号を使用したという説明だ。この「四集系列」(付建舟の用語)とは初集本を指す。清末の刊行物だから元版(十集系列)の集編番号を使用すべきだという理屈の通った正しい意見は採用しなかったわけだ。訂正せずもとのままに時代が異なる民初の集編番号をつけて平気なのが不可思議である。文娟は別の個所で「光緒年間的十集系列」「民国年間的四集系列」(52頁)と区別している。区別するならば統計表は元版だから集編番号を訂正する必要があった。研究専門書は正確さを基本にすべきだ。修正する手間を惜しむ理由がわからない。

また上記「統計表」の誤植もそのまま引き継いでいる。『俠黒奴』の底本を尾崎紅葉訳『俠男[黒]児』と誤って訂正していない(陳鵬安指摘1)。また「黒衣教士」の原作者を(俄)溪岸[崖]霍夫原著と誤記したまま(陳鵬安指摘2)。『俠女郎』の底本である押川春浪作品を1907年博文館と誤ったまま(樽目録第13版2021で記載済み。

陳鵬安指摘4)

「説部叢書」に関する対応を見ると陳大康とは異なる。陳大康が『中国近代小説編年史』(北京・人民出版社2014.1)で文娟と同じ誤りを犯した。くり返せば清末の「説部叢書」に民初初集本の集編番号を記載したのだ。つけ加えると民初の「林訳小説叢書」を注記するのも正しくない。それらが誤りであると指摘されると陳大康は後の目録ではそれらをすべて削除した。誤記をしたという認識があるとわかる。文娟も指導教授の陳大康に学ぶべきだった。注釈をつけて言い逃れることができると思ったのは研究者としていかなものかと思う。

気のついたいくつかを記す。

菊池幽芳『乳姉妹』について次のように説明する。「《乳姉妹》由日本作家菊池幽芳所著, 并非欧美小説家的作品」(70頁)。誤り。幽芳の底本はCHARLOTTE M. BRAME(筆名 BERTHA M. CLAY)“LORD LISLE'S DAUGHTER.” 1880だ。

林訳『吟辺燕語』はシェイクスピア劇ではなくラム姉弟の『シェイクスピア物語』だ(……, 而是蘭姆姐弟編写的《莎士比亞戲劇故事集》<sup>②</sup>) 85頁。ここつけられた注<sup>②</sup>は次のとおり。「樽本照雄在《林紓冤罪事件簿》則認為林紓翻譯的是奎勒・庫奇(A. T. Quiller-Couch)《莎士比亞歷史劇故事集》(*Historical tales From Shakespeare*)中的文章」。この注釈を『吟辺燕語』または『莎士比亞戲劇故事集』につけるのは不適切である。まるで『吟辺燕語』の底本がクイラー＝クーチ本だと樽本が書いているように読める。誤解を招きかねない。もとよりそのようなことは書いていない。

登張竹風「賣國奴」は先に雑誌『明星』(1904)に「連載」され、後に金港堂から単行本になった。文娟はそう複数個所で書いている(115、117、206、207頁。注:樽目録第3版に『明星』「連載」を記していると説明する(24頁注②、66頁注②、115頁注①)が誤り。そんなことは書いていない。「連載」の明細を示さない。実物で確認していないことが明らかだ。またその典拠についても注釈がない。実を言えば『明星』に掲載された登

張竹風「賣国奴」は翻訳内容の要約である。「連載」ではなく1回だけの読みきりだ。ゆえに「連載」後に単行本化されたと書くことはできない。

『明星』「連載」の根拠は巻末の「参考文献」198(436頁)に掲げる楊鳳鳴「近代中国文学翻訳中の日本影響——以吳構為例」(太原・山西大学2014)にある。楊鳳鳴が文娟に先行して「連載」と書いている(8、24頁)。「連載」ではないから明白に誤りだ。文娟は自分で検証することなく楊鳳鳴の語句を無断借用した。そう言われたいなければ文娟はそれぞれの個所に注釈をつける必要があった。それを怠ったからあたかも文娟自身が探し当てたような印象を与える。(注:この部分については清末小説研究会ウェブサイト2022.9.21で公表した)

沢本香子「書家としての吳構」についてはあいかわらず注記せず「参考文献」にも掲載しない。

「参考文献」に本稿で示した②荒井論文(2019)は収録していない。文娟論文を批判するものは意図的に外すというのは専門書として公明正大な姿勢に欠ける。また参照したはずの崔琦論文(2014。本稿の問題点12に掲げた)も見えない。それよりも文娟自身の論文①(2018)を掲げないのはどうしてなのか。単行本に収録したとはいえ以前に独立した論文1本として発表しているのだ。

「参考文献」に収録するのが普通だろう。不可解である。

ひとこと。文娟(あるいは多くの研究者)はいまだに樽目録第3版(齊魯書社2002)を使用している(問題点5でも述べた)。そこにある記号の区別を理解せずあれこれと「不足」を言い立てる。理解しがたい。紙媒体の第3版は第4版が公開された時点で利用期限が切れている。第4版から電字版で公表を継続しているのを知らないのだろうか。2022年には第14版をウェブサイトで公開した。最新版を使用するのが研究の基本だ。

ではウェブサイト公開の文章は資料として採用しないという中国学界の指導方針でもあるのか。それも違う。張治がウェブサイト「彭拜[澎湃]新聞」(2020.1.16)に掲載した書評を文娟「参考文献」189として掲げている(435頁)。ネットの目

録Xを使用している陳鵬安もいるのだ。

ふたこと。『繡像小説』の編者問題と発行遅延問題のふたつは1980年代に活発な論争があった。編者が李伯元かどうかについて雑誌『出版史料』(1986)が特集を組んだくらいだ。しかし関連する汪家熔、張純の論文は文娟著作の「参考文献」にはない(汪家熔の別論文は53頁注①にある)。「繡像小説」については第5章を設けている。それにもかかわらず従来の研究を無視したのは残念だ。陳大康も文娟もその論争経過については見ぬふりをして放置した。

特に発行遅延問題を取り上げる。張純が1986年に提出した。それ以前、研究者はすべて架空の刊年を書いていた。それ以後も同じだ。月2回の刊行が維持され李伯元の死去によって停刊した、である。阿英が根拠もなくそう断言したからにはほかならない。それゆえだろう中国学界は長年にわたって張純の提起した発行遅延問題を黙殺し続けた。一方で日本の研究雑誌『清末小説から』が関連論文を掲載した。

では刊年不記の雑誌の刊行をどうやって特定するのか。当時発行されていた新聞広告が資料として利用できるという発想は中国学界では生まれなかった。張純でさえ新聞は信用できないと強く反対したのだ。しかし事実がその方法の正しさを証明している。当時は利用できる新聞は多くない。影印本などが整備されるにつれて複数の資料を見ることができるようになった。新聞を利用して論文を書く中国人研究者も出始めたという経緯なのだ。

だから文娟が該誌第72期の刊行年月について次のように書いているのに首をひねる。「72期雑誌究竟何時出版無法確定, 過去学界对此問題進行過一定的探討」(208頁)。この説明はほとんど虚偽に近い。中国学界で「一定的探討」を行なった過去など存在しないからだ。張純論文以外では文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」(『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』2006年第3期(総第185期)2006.5(15))と陳大康「中国近代小説史料——《繡像小説》中小説史料編年」(『文学遺産 網略版』劉霞によると2010.4.5

(未確認) 電字版。のち『中国近代小説編年史』に吸収された) および王文君「浅談近代報刊廣告の問題——以《申報》刊《繡像小説》廣告為例」

『九江学院学報(社会科学版)2015年第3期 未見)、同「再議《繡像小説》的停刊時間——讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」(『中国海洋大学学报(社会科学版)』2016年第2期 2016.3.10) くらいしか知らない。それだけをもって「一定的探討」というのか。ならば張純論文1986年から文迎霞論文2006年までの20年間という空白はどう説明するのだろうか。見解の相違というか。

しかも『繡像小説』が第13期より刊年を表示しなくなったことも記述しない。阿英の根拠のない断言が発行遅延問題を無視した原因であることも説明しない。『繡像小説』についての阿英論文は基本文献としてははずすことはできない。だが文娟はそれを「参考文献」に掲載しない。ないない尽くして落胆する。

2014年になって前出陳大康『中国近代小説編年史』が出版された。まるで最初からわかっていたかのように『繡像小説』の刊年不記を言い、新聞を利用して推定刊行年月を記述したのだ。文娟も同様である。『繡像小説』刊行の資料に新聞を使用するという発想は目の前に落ちていたらしい。というよりも新聞利用は説明の必要もない当然の方法として文娟の周囲では確立していたのだろう。そうして李伯元死後の1906年5月に「文明小史」第59回を掲載した『繡像小説』第55期は刊行されたから、劉鉄雲の原稿を盗用したのは欧陽鉅源だ、と当たり前のように書く(199頁)。

陳大康と文娟のふたりとも問題が無視されつづけた情況に言及しない。中国人から直接聞いたセリフが思い出される。「事實は誰が発見しても事實にすぎない」。ここには学術的優先権を尊重する考えが存在しない。陳大康も文娟も研究の基本姿勢は同じに見える。先行論文の積み重ねの上に成果が生まれる。その経過を飛ばして結論だけに乗って立論しているのだ。それが中国学界のやり方らしい。しかし国境を超えた研究の世界でそれは通用しない。わざわざ言うまでもないことだった。

## 清末小説から

LYDIA H. LIU ○ LIFE AS FORM: HOW BIOMINESIS ENCOUNTERED BUDDHISM IN LU XUN “ JOURNAL OF ASIAN STUDIES ” VOL.68, NO.1, 2009,2 未見

劉禾 (LYDIA H. LIU) 著、孟慶澍訳 ○ 魯迅生命觀中的科学与宗教 『魯迅研究月刊』2011.3-4期 2011.4.9-5.6

顧 鈞 ○ 《炭画》的中国之旅 『魯迅研究月刊』2012年第3期 2012.4.10

謝 仁敏 ○ 《女子世界》出版時間考辨——兼及周氏兄弟早期部分作品的出版時間 『魯迅研究月刊』2013年第1期 2013.2.20

王 文君 ○ 浅談近代報刊廣告的問題——以《申報》刊《繡像小説》廣告為例 『九江学院学報(社会科学版)2015年第3期 未見

呂 順長 ○ 『教育雜誌』に見る日本教育関連の記事 『四天王寺大学紀要』第59号 2015.3 電字版

王 家平 ○ 魯迅訳作《造人術》の英語原著、翻訳情況及文本解読 『魯迅研究月刊』2015年第12期 2015.12

文 娟 ○ 文学場域変遷中的商務印書館与近代小説——以十集系列“説部叢書”為研究視角 『文藝理論研究』2018年第38卷第2期 2018.3.25 電字版

阮 詩芸 ○ 莎訳史之蘭姆体系：從“莎士比亚”的訳名説起 『翻譯界』第6輯 2018.11

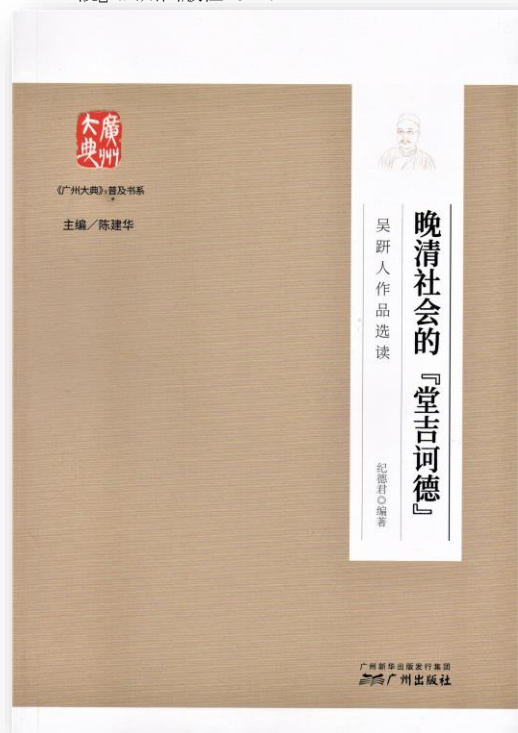
国 蕊 ○ 從“世界奇談”到“女子世界”——再議《造人術》的訳介 『魯迅研究月刊』2019年第12期 2019.12.31

—— ○ 原抱一庵『造人術』全訳兼兩版本校考 『魯迅研究月刊』2020年第3期 2020.4.15

—— ○ 上帝頌・造人術・吸血鬼——美国小説 *An Unscientific story* 跨文化伝播中的變異与重構 『済南大学学报(社会科学版)』2022第4期(総第32期) 2022.7.15

何 嘉俊 ○ 論晚清科学小説《新法螺》的「跨語際實踐」 国立清華大学中国文学系 『清華中文學報』第25期 2021.6 電字版

紀 德君○『晚清社会的『堂吉訶徳』：吳趸人作品選  
讀』 広州出版社2021.12



陳 鵬安○吳禱相關史料的新發現——兼与文娟《試論  
吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務  
印書館所刊單行本為研究視角》商榷『明清小説  
研究』2022年第1期（總第143期）2022.1.15

符 傑祥○誰是“路易斯託崙”？——魯迅訳《造人術  
》作者考，兼論女作家“失踪”之謎『現代中文  
學刊』2022年第1期（總第76期）2022.2.18

陳大康、張沢如○中西互置与古今交疊：近代小説書名  
的編撰策略『編輯之友』2022年2期 2022.2.28  
電字版

孫 超○試論清末民初報載話本体小説的承伝与変異  
『明清小説研究』2022年第3期（總第145期）  
2022.7.15

許萌、楊波○晚清文学中的公使形象——以張蔭桓為中  
心『明清小説研究』2022年第3期（總第145期）  
2022.7.15

賴慈芸主編『台湾翻譯史：殖民、国族与認同』  
台湾・聯經出版事業股份有限公司2019.9

導 論 翻譯之島 ……賴慈芸  
第1章 「文体」与「国体」：日本文学在日治時期台  
湾漢語文言小説中的跨界旅行、文化翻譯与写錯  
置 ……黄美娥  
第3章 日治台湾<小人国記>、<大人国記>訳本来  
源辨析：兼論其文学史意義 ……許俊雅  
第6章 兩個源文之下的混種翻譯：居間遊移的無家孤  
兒 ……陳宏淑



お知らせ

